

7月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
7月号
No.601

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ヒマワリとズッキーニ

△表紙の花▽ 桜子

まん丸のズッキーニは賀茂茄子やトマトと同じように、しばらく食卓に飾って眺めている。

向日葵は日本では食用油くらいしか知られていないが、中国ではお茶を飲みながら向日葵の種を食べる。殻を割るのが面倒だし、中身も少ないので苦手だなど思っていたが、実はすごい健康食品なのだ。ビタミンE、鉄分、亜鉛他多くの栄養素が含まれる。コレステロールを下げ高血圧や貧血を防ぎ若返りの効果もある。

ズッキーニはペポカボチャの仲間。こちらもビタミンBや食物繊維を多く含む。鑑賞してもお料理しても元氣一杯の夏の花と野菜。

花材 向日葵(菊科)

柏の斑入り葉(山毛櫨科)

ズッキーニ(瓜科)

栗(稲科)

花器 ガラス花器

下向きに咲く内気な花

△2頁の花▽ 桜子

以前はアリウムの仲間に分類されていたが、今は百合科で、ネクタロスコルドウム・シクラムという学名で呼ばれている。買った時から花が枝垂れていて、上を向いた!と思ったら、花が枯れていた。花が終わると上を向くのだ。不思議な花だった。夏はガラス器にいく事が多い。花茎が花器の下まで着かないように浅く挿



して、ガラス越しに茎を見えにくくしている。

夜に水温が上がって花が萎れてしまう事が多いので、夕飯の片づけをしながら水を替える事になっている。朝起きて花がきれいだと気持ちがいいから。

花材 ネクタロスコルドウム・シクラ

ム(百合科)

トルコ桔梗二種(竜胆科)

ディフェンバキア(里芋科)

花器 紺色ガラス花瓶

エレガフミナ

〈3頁の花〉 櫻子

今年初めて出会ったアフロディーテ・エレガフミナ。クレマチスの仲間である。とても優しくしなやかで、ワインディキヤンタに飾った。暑い部屋でも時折通りぬける風に揺れながら、長持ちしてくれた。

北半球の温暖な地域には原種が約300種はあるクレマチス(金鳳花科クレマチス属)。その中で「鉄線(中国名・鉄線蓮)」と呼ばれるのは中国原産の一種だけなのに、つい何でもテッセンと呼んでしまう。改良種であっても野生のような雰囲気を持っているからだろうか。フランスの個人の庭で作例に似た小さな花のクレマチスが石壁に這わせて育てられているのが美しかった。

花材 クレマチス・アフロディーテ・

エレガフミナ(金鳳花科)

アガパンサス(百合科)

野葡萄(葡萄科)

花器 ワインディキヤンタ



こけぼく
しゃれぼく
苔木 晒木

仙溪

父がいけばな展に出品してきた立花や生花には、苔がびっしりとついた古木を好んで使っていた。冬の苔梅は特に好きだったようだ。苔むした枝自体、なかなか手に入らない花材であるが、深い味わいというものを感ずることができる。一本筋の通った凛とした風格のようなもの。父の求めていたものもそういうものだったと思う。

苔梅などをいけたあとは、花が終わっても捨てずに残している。盛花に覗かせたり、組み直して立花に使ったり、蔓ものをいけるときの土台として使える。

また晒木も残してある。主に立花に使うためだが、盛花や投入に加えると、重厚な雰囲気や自然の妙味を表現できるので、見つけたら大事に持っておかれるといい。

盛花や投入に晒木を混ぜる場合、重量のバランスに気をつけること。そのまま器にいけるのではなく、しっかりとした支柱をつけていける。晒木をうまく使いこなせるかどうかは、重さに見合った仕掛けができるかどうかにかかっている。作例では短い晒木を水際に見せて、上に山苔をのせている。本来なら朽木を使いたいところだが、これでも深山の空気を感ずられる。苔には霧を吹いて飾る。

花材 夏櫨(つじ) (躑躅科)

京鹿の子(きんこ) (薔薇科)

蜚袋(ひふく) (竜胆科)

晒木・山苔

花器 かいらぎ釉水盤 (木村盛伸作)



③ 晒木の仕掛けが隠れるように、水際に夏櫨を加える。後方にも夏櫨を低く入れて奥行きをつくる。



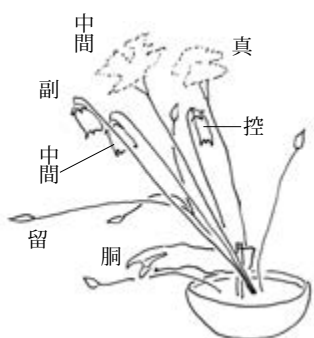
① 晒木に棒（作例では割り箸を使用している）をつけて（作例では太針金で括り付けた）剣山にとめる。重さによってはねじ釘で固定したり、棒を2本つけたりすればいい。



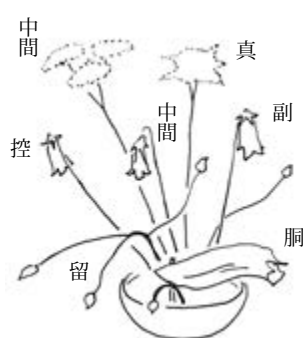
④ 京鹿の子を左前と右後ろへ立てたところ。空いたところに蛭袋をのぞかせる。晒木はそのままでもいいが、作例では山苔をのせて霧を吹いた。（4頁の花）



② 夏櫨を低く前へ出す。



右横から見たところ



盛化斜体留主型（逆勝手）



【記録】

京都いけばなプレゼンテーション2013

今年から京都市と京都市芸術文化協会の主催による新しいいけばなイベントがはじまった。いけばな展と新たな情報発信をする。

一回目は「六月六日はいけばなの日」のピーアールを兼ねて、花菖蒲花会、お稽古はじめいけばな体験とシンポジウムという内容で開催され、花会には桑原専慶流から三名が立花、生花、現代花を出品した。

三十四流派それぞれの違った花の見せ方があり、特に古典花では流派による葉組の違いを観る事ができた。

シンポジウムには華道以外にも狂言の茂山千五郎氏、尺八の倉橋容堂氏、ピアノの高木千寿子氏が加わって「伝える」ことの伝統と工夫についてお話をいただいた。

また基調講演は国際日本文化研究センター名誉教授の村井康彦氏が中世の文化の活力についてお話くださり、「いけばなが文化醸成のための集いの場をつくる」という考え方を提案していただいた。

ビッグイシュー日本版

「生き残りのしくみ」②

植物が動物を養っている、といっても食べつくされては困るので、植物それぞれに独自の工夫をして自己防衛をしている。「渋み」「辛み」「苦み」「えぐみ」「酸み」などもその自己防衛の現れだ。

例えば柿の実には中のタネができるまで虫や鳥には食べられないように「渋み」をもっている。やがてタネができる「渋み」は無くなつて甘くなる。

「タデ食う虫も好き好き」というように、たとえ辛いタデを好んで食べる虫がいるとしても、植物も動物も、それぞれに棲み分けをして好みを分散することで生きていけるのだ。

「競争したらどちらかが滅んでしまう。生物はちよつとだけでも嗜好が違つと、どこかで生きていけるんですよ。」(田中修先生)

病気への生き残り戦略 多様な子孫を残すこと

桜餅の甘い香りのもとは、虫を撃退するためにサクラが用意したクマリンという物質である。サクラの葉にはクマリンになる前の物質と触媒になる物質が別々に存在していて、虫がかかることでこの二つの物質が出合い、反応が進んでやがて香りが

でてくる仕組みになっている。

他にもクスノキの葉を傷つけると芳香を放つことはよく知られている。(防虫剤に利用↓樟脳)

またマツやヒノキなどの針葉樹はカビや病原菌を遠ざけるために香りを放っている。私たちはそれを爽やかな香りとして感じて「森林浴」を楽しんでいる。このような植物が放つ香りは総称として「フィトンチッド」と呼ばれている。

「植物は突然変異を繰り返して、ここまで進化してきた。ある植物の原産地を調べると、その種が生きられるぎりぎりの環境であることが多い。ヒノキもあの香りを出したから原産地で生き残つてこれたんだと思う。その後人間があちこちに移植して増えたわけです。」(田中先生)

さらに植物は怪我をするとかさぶたをつくつて身を守る。バナナやリンゴを切ると表面が褐色に変わるのもその一つで、これはもともと紫外線の害を消すために植物の中にあるポリフェノールが酸素と反応して固まったもの。

タラヨウ(別名・ハガキノキ)の葉に釘などの尖つたもので文字を書く、しばらくしてからくつきりと黒く浮き上がってくるのも同じ原理だ。

植物にとつて多様な子孫を残すことが病気に対する最大の生き残り戦略であり、そのためにいろんな知恵をしばってきた。(次号へつづく)



【記録】

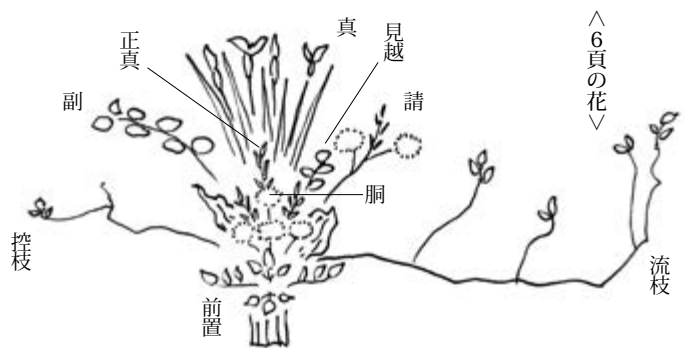
日本いけばな芸術展(東京)

会期 5月24日(金)〜25日(土)
会場 日本橋高島屋
出品 桑原仙溪
花型 除真立花
花材 真松
正真 紫蘭(桃色、黄色)

副 晒木
請 五葉松
見越 晒木
控枝 松
流枝 晒木
胴 燕尾仙翁
前置 晒木
松



△6頁の花▽



△8頁の花▽



平籠にいける

櫻子

穂咲七籠が出回ると祇園祭も近いなあと感じる。夏の草花をいける時に足元に使ったり、花型に広がりを感じさせるには必ず添えたいと思う。

まん丸の小さな蕾が、ぱつと咲いて綿帽子のような真っ白の塊になる。七籠に葉が似ているのでこの名前がついた。七籠とは同じバラ科であっても属は違う。木ではあっても涼しげで軽いので籠花にも良く似合

う。

白竹の平籠に矢筈薄、桔梗、撫子と取り合わせた。穂咲七籠を足元に添えと、左右に長く横張りの花型にいける事が出来る。そうする事で他の草花も伸びやかで生き生きとした姿になり、それでいて軽やかである。夏は風通しの良い花をいけたいと思う。

花材 矢筈薄(稲科)

穂咲七籠(薔薇科)

撫子(撫子科)

桔梗(桔梗科)

花器 白竹平籠



黄菖蒲きしやうぶ

〈10頁の花〉 仙溪

初めて海外でいけばなを披露した時にいけたのが黄菖蒲の生花だった。ドイツ・デュッセルドルフ郊外につくられた日本庭園の池で咲いていたのを切らせてもらったが、大きな長い葉でなんとか葉組もできて、ほっとしたのを覚えている。

西アジアからヨーロッパに分布する黄菖蒲が日本に来たのは明治頃だそうで、今では全国の水辺に野生している帰化植物である。

京都の深泥ヶ池でも見るようになったが、ここには貴重な在来植物が多いので駆逐されないか少し心配である。

ともあれ花菖蒲や杜若には無かった黄色の花は人目を引く。珍しく花屋で売られていたので同じ水辺の植物である半夏生はんげしょうをとり合わせ、薊あざみで色を加えた。黄菖蒲の花には花菖蒲ほどの強さはないが、優しい印象をつける。

花材 黄菖蒲（菖蒲科）

半夏生（藺科）

薊（菊科）

花器 長方形陶水盤（伊藤典哲作）

ジューンベリー

〈11頁の花〉 仙溪

花型 二瓶飾り

主瓶 草型副流し

ジューンベリー（薔薇科）

副瓶 行型

ミニ薔薇（薔薇科）

花器 陶花瓶

ガラス小鉢



日本の中南部、四国、九州に分布するザイフリボク（采振り木）はシデザクラの別名があり、四く五月に白くてやや細長い五弁花が咲いたあと実ができて熟すと食べられる。

ザイフリボクの仲間では北米原産のアメリカザイフリボクはジュンペリーと呼ばれ、近年果樹として栽培されてきているらしい。

花屋でジュンペリーの名前で赤い実のついた枝が売られていたので、生花にいかけてみた。はじめていけたのだが、葉の水揚げもよく、これから花材として出まわるようになるだろう。一種では物足りないので、ミニ薔薇をとり合わせて二瓶飾りにした。

ギガンチウム

ホワイトスネーク

△12頁の花▽

仙溪

葱坊主を二種類使った。どちらも立派な球状に無数の花が伸び出ている。

鮮やかな紫色はおなじみのアリウム・ギガンチウムで、茎の曲がった白っぽい方がアリウム・ホワイトスネークと呼ばれていた。

この二種の強さに負けない花に赤い大輪の百合を選んだ。品種名はビビアナで、二本でこれだけのボリュームがある。

この花器は口が広いので大きめの丸剣山を底に入れていけている。アリウムは剣山にさして、百合は投入式にかけた。

花材 アリウム・ギガンチウム（百合科）

アリウム・ホワイトスネーク（百合科）

百合（百合科）

花器 広口陶花瓶（前田保則作）



グランドマスター

「グランドマスター」という映画を観た。近代の中国武術継承者たちがどのように生きたかが描かれている。ぐつぐつと煮える蛇のスープを前にして、火に新たな薪を入れるかどうかを語りながら、武術界の舵取りを話し合うところが面白かった。火が強いと焦がしてしまうし、弱いと本来の味がでない。武術の神髄を伝承するために、新しい息吹を加えることが良い選択なのかどうか、武術界のトップは苦悩する。

中国武術の門派は四百以上あるそうだが、その中の一つ詠春拳の継承者の一人、葉問（イップマン）が映画では中心的存在になっている。詠春拳は中国南部に伝わる武術で、技の型は「小念頭」「尋橋」「標指」のわずかに三つ。この基本を修練することで自然に体が反応して相手の攻撃を防御する。

いけばなは武術のような戦いではないので比べるのはおかしいが、稽古を重ねて技と心を体得することや、その神髄を身につけて次へ伝えることに悩むのは同じだと感じた。

いけばなにとって「この三つのことを身につけよ」というようなものは何だろう。いろんなことが思い浮かぶが、つきつめていけば次の三つを追求することになると思う。

「心」と

「技」と

「美の感覚」。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
7 月号
No.613

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





被災地へ

仙溪

5月の末に、2年ぶりに被災地を訪れた。NPOの仲間3人で訪れたのは前回と同じ宮城県気仙沼市の2カ所の仮設住宅。今回も現地のボランティア団体にお世話になり、当日は会場がいっぱいになる賑わいになった。前回の訪問を覚えていて下さった人も多かった。

「お花は人気がありますね」。孤独にならないようにと、イベント参加を呼びかけても、いつもそんなに多く集まってくださらないとのこと。

「あと2年は仮設暮らしなの」。集団移転の候補地は決まったものの、建設待ち状態だそうだ。「オリンピックが決まったおかげで、いつになることやら」「巨大な防潮堤ができやうと海との関わりが絶たれてしまう」お花の後の雑談に花が咲く。「帰ったら皆に伝えます！」

過去に何度も津波災害を経験した三陸沿岸。気仙沼にあるリアス・アーク美術館では、「東日本大震災の記録と津波の災害史」という常設展示で、悲惨な現実を記録、検証し、現場から未来に向けてのメッセージを発信している。同名の図録（800円）は郵送で購入可能。

「人間だけを自然から切り離してはいけない。人類は自然を畏れ敬い、自然のリズムに身をゆだねて生きてきたはずだ。その永い時間の蓄積を再認する必要がある。」図録より。ここに編まれた一言一言が胸を打つ。多くの人と共感できればと思う。私たちの未来のために。



花の御座す場所

△表紙の花▽ 仙溪

花のおわす場所をどうつくるか。そんなテーマで花をいけてみた。主役の花を自分に置きかえて、まわりに居心地のいい景色をつくる。見たことの無いような景色ができればなおいい。大自然は決して単調ではなく、千変万化だ。自分の記憶の引き出しを頼りに、いけばなに「自由」を得よう。

花材 オクロレウカの葉(菖蒲科)
アンズリウム二色(里芋科)
花器 ガラス水盤(岩田糸子作)

市松模様の器

△2頁の花▽ 櫻子

おやつをいれておきたくなる器。色とりどりの飴のかわりに、3色の蜜袋をいけた。

花材 珍至梅(薔薇科)
蜜袋三色(胡麻の葉草科)
花器 釉彩市松蓋物(横山武司作)

撫子が主役

△3頁の花▽ 櫻子

たった一本の撫子だけで、配色と花形次第で主役になれる。

花材 猿捕炭(百合科)
撫子(撫子科)
紫陽花「紅」(紫陽花科)
花器 濃青釉紫紅斑花瓶
(宮下善爾作)

葉蘭 七葉 仙溪

花型 草の花型 副流し

花器 白竹筒

生花の中でも最も基本的な形式をそなえている「葉蘭」は、緑の葉をあつめて形を作り、その造形の美しさを見るいけばなであり、華麗な花の美しさよりも、静寂な内面美を見

るいけばなといえる。

単純な葉の組みあわせによって、均衡のよくとれた流麗な花形を造り上げ、そこに高雅な品格をもとめようとする。徹底した技術の修練によつて素朴な材料の中から美をみつけ出すこの生花は、誇張していえば、「禪」のこころをもつものといえる。

(以上、専溪生花百事より抜粋)

以前は大、中、小の葉を組んで売られていたが、最近では大きな葉しか売られていない。中葉、小葉は家の庭から切つていけている。



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ③

立花時勢粧 上 (前号の続き)

- 直心立の内真の花形 (第四図)
 直心立の内行の花形 (第五図)
 直心立の内草の花形 (第六図)



第四図



第五図



第六図

(ここでは解説文がないので、上の3図は「立花秘伝抄 五」の「極真立」で掲載します。)

除心真行草の事

除心のきしんの内真の花形と云うは、直心すくしん立てをやつして、心を横へのき、梢こずえの上へ回かえして、除心とも正心立とも名付けた。副そえ、請うけ、見越みこし、流枝ながし前まえ置おき、長短高下の出し所、直心立とかわる事なき事は、古来仏前対の花にかならず用い来る花



第七図

立花 木蓮除真
 除真立の内真の花形 富春軒
 木蓮 伊吹 松 栢植 躑躅 小菊
 檉木 枇杷 著我 要

形なるゆへ。卓、香炉、鶴亀の莊嚴、定法あるにまかせ、立花もこれに随いて、流枝、前置の長さ、その外寸法式ある事なり。然るに常の花にもその式法を守りて人におしゆるの初めとするより、あまねく立花の風俗となれるものなり。

除心立の内真の花形（第七図）

除真の内行の花と云うは、前の花形をやつして、異曲さまざまにしんをくるはせ。六つの大枝の長短高下、心に随いて、くるいたる時は、花形風流にて、ひときわ花麗に見所おおく、作意も働きて、おのずから珍しき姿も出来るなり。往昔のすき人むつかしくあしらいかたき心をあつめ、鍛錬工夫をなし、いろいろの花形を指し初めて、代のたのしみへとなす。所謂水際除のしん、請流枝立、中流枝立、左流枝立、内副立、流枝持の花、これを行の花形という。この心をもつて見る時は、古来花に自由をなして、さまざまの景気をかえ、人の心をなぐさむるの使とするものなり。然るに田舎には定法にかかわりて、自由を指し得る事なし。今ここに

図してその風体を知らしむるものなり。これ私の作意にはあらず。近來ひとの版行せしむるの書に多くこれある所なり。

除心の内行の花形 請上り立（第八図）

同 水際除 請上り立（第九図）

同 流枝持立（第十図、第十一図）

同 内副立（第十二図、第十三図）
同 請流枝立（第十四図、第十五図）
同 中流枝立（第十六図、第十七図）
同 左流枝（第十八図、第十九図）

第八図

立花 松除真

除心の内行の花形請上り立 桑原次郎兵衛これを立つ

松 梅 柳 栢植 檉木 椿 嫩



除心のうち草の花形と云うは、行の花形より指出して心の除様定相なく、草木自然の形をそのままだに、さのみ細工にかかわらず、或は直ぐ或は斜に、請、副、流枝、前置その外の大枝もまたかくの如く。長短高下の定法を離れ、請なふして請をあしらい、副なふして副をもたせ、六つの枝、ありと思えばなく、なきかとおもえば忽然と有りて、一枝も欠くる事なく、出生に背かず、法度をもれず、花形円満にして、しかも意気あり発生あり艶あり色あるを、草の花形という。これ格を離れて格にあい、習を捨て習にかなう手段なり。されば古代の名師工夫をなし、心をくだきて、自得の妙手より、指し出したる形にして、立花の骨髓これなるべし。近代の人、この花形を指し得んことを願えども、従来の手癖離れがたく、又は七の法式に自縛せられて、いつも同じ花形のみにて、過ぎ行くこと。例えば鋳型をもつて瓶を鋳るに、出来不出来あるといえど、瓶の形は変わる事なきがごとし。名人の花と云うは、十度二十度指すといえども珍しき一手あらずという事なし。されば真行の花は指し得るとも、草の花形にいたりては、指

す人まれなり。師を尋ね域に至らずんば、この妙を得がたかるべし。仮に図をしるして爰に書を略しぬ。

除真の内草の花形（第二十図～第三十図）

※省略した絵図は後の関連項目のところで掲載予定。



※参考文献
『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成 第一期第一巻』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

第二十図

立花 梅除真
除真の内草の花形 桑原次郎兵衛
梅 松 柳 椿 水仙 枇杷



スポットライト 仙溪

表紙とこの頁のいけばなは、あえて中央に低く花をいけている。

群生の中でキラリと光る花、そんな印象のいけばなである。

いけばなにおいては、「間」が重要になるが、花形の中央に縦長の隙間をつくると、不思議な風の通り道が生まれる。

立花の花形に「二つ真」というのがある。「立花時勢粧」にも一作絵図が載せられているが、水面まで真っ直ぐに空いた隙間の緊張感が伝わってくる。



その解説は先に掲載するが、「隙間をどう生かすか」というテーマで花をいけてみるのは面白い。

目には見えないスポットライトが、舞台中央の花を浮かび上がらせている。

花材 縞太蘭しまふとらん（蚊帳吊草科）

紫陽花（紫陽花科）

百合（百合科）

花器 カットガラス水盤





ブルーレースフラワー

△10頁の花▽ 仙溪

赤い葉脈のカラジウムが決め手。

花材 トルク桔梗（竜胆科）

ブルーレースフラワー

（芹科）

カラジウム（里芋科）

花器 桃花壺（木村展之作）

スモークツリー

△11頁の花▽ 櫻子

向日葵の黄色と、花器のモザイク柄にある黄色との関連性が面白い。

花材 スモークツリー（漆科）

向日葵（菊科）

アンズリウムの葉（里芋科）

花器 石垣手花入（森俊次作）



出合い花（10） 櫻子

薔薇

フランネルフラワー

家元がはじめた「出合い花」だが、いざいけてみるとなかなか難しい。「テキスト」のために写真撮りをする以上、普通の一輪挿しではだめだと思ふからかもしれない。

たった二本のいけばななのに、とても奥が深い。

新鮮な出合い。

とっておきの器えらび。

この二つのテーマをクリアしなければならぬ。

でも、日常の中で、たとえば来客前に急いで花のいけかえをしているような時に、いい感じの出合い花を自然にいけていることも多い。そんな時には、「新鮮な季節の花を、洒落た器に」と考えながらいけている。

「出合い花」にはいけばなのエッセンスが凝縮していると思うので、是非みなさんにも挑戦してみてほしい。新たな発見がきっとある。

大好きなイブピアッチェという薔薇に、優しいフランネルフラワー。あまり考えすぎずに、本能的に好きな花を組み合わせしてみた。

花材 薔薇「イブピアッチェ」

（薔薇科）

フランネルフラワー

（芹科・オーストラリア原産）

花器 結晶釉細口花瓶

（前田保則作）

嫩？

仙溪

「立華時勢粧」の紹介も3回目となったが、読んでいただいているだろうか。現代語訳になると原文の雰囲気伝わらないので、あえて元の言い回しのままだにしている。少々読みづらいかもしれないがご容赦を。絵図の横に示した花材名については、『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日本華道社刊）を参考にさせていただいている。

その中に「嫩」という花材名が何度も出てくる。はじめて見る字で調べてみると、

【嫩】「音」ドン ノン

【訓】わか・い

《意味》若い。若くて柔らかい。とあった。嫩葉は若葉のこと。柔らかな枝を加えることで、立華を生き生きとさせているのだろう。



鳥の囀りに耳を傾けるの図。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
7 月号
No.625

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出逢い花（20）

レオントキール・オバレイ

〈表紙の花〉 仙溪

レオントキールとは「ライオンの手」という意味だそう。この花の蕾を写真で見たが、確かにライオンの手に見える。

南米原産でアルストロメリアの仲間だが、地面を這うか、もしくは蔓で育つ。作例のレオントキールは湾曲した太い茎の先に、深紅の花が球状に集まって咲いていた。

さて、何といけようか。実ができたばかりの山帰来は、明るい緑色の葉が初々しい。見た瞬間に出逢わせたくなった。

今回も敢えて水際が見えるようにいけてみたが、不思議な一体感が生まれてくれた。そしてそれぞれの個性がはつきりと見て取れる。互いに1本ずつの出逢い花ならではの面白さだと思う。

花材 レオントキール・オバレイ

（百合科・彼岸花科・アルストロメリア科）

山帰来（百合科）

花器 濃青色陶花瓶（谷口良三作）

えんどう豆

ベル鉄線

〈2頁の花〉 仙溪

2頁の写真は5月初旬の撮影で、え



んどう豆の園芸種だと思いが、宿根スイートピーもこのようにいけられる。

春のスイートピーが一年草で、その花だけが出荷されるのに対して、初夏に蔓のまま出荷される多年草のスイートピーを宿根スイートピー、またはサマースイートピーと呼んでいる。

枯枝を固定しておいて、豆の蔓をからませ、ベル鉄線を根締めに加える。

花型 二種挿し 草型 副流し

花材 宿根スイートピー（豆科）

ベル鉄線（金鳳花科）

花器 盃型ガラス花器

立花研修会の花

△3頁の花▽ 仙溪

燈台躑躅 真・請

土佐水木 副

躑躅 見越

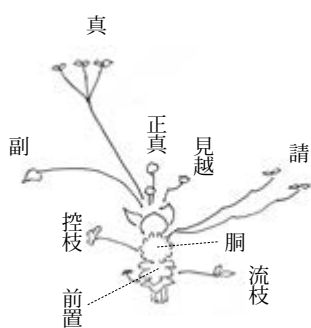
芍薬 正真

紫陽花 控枝・胴

鳴子百合 流枝・前置

擬宝珠 大葉かこい

撫子 あしらひ



立花秘傳抄 五

(除真) 草の花形立様の事

草の花の立ようと云うは、前の六つの花形を、よくよく修練して後、かれこれをかよわしまじ

えて、或は直心立にして、流枝立あり、或は請あがり立にして、左流枝あり、内副にして、流枝持あり、水際除にして、中流枝立と、さまざまに作意をめぐらし、日々に新たに、瓶ごとにあらたにして、七つの枝よくそなえ、法度指し合い、古法を背かず立てるなり。

初心の内は、花形かゆること成しがたし。こ

れを名付けて、いろは立、板木花とて嫌うなり。たとえば古歌を吟じて、楽とせんよりは、秀歌を詠むにはしかじ。

(・しかじ・に及ぶまい。・にまさるものはあるまい。)

立花時勢粧上には11作の除真草の花形図がある(すでにテキスト613号で1作を掲載)。その内ここでは富春軒作の2作を掲載する。枝や花、葉や実の絶妙なバランス感覚を読み取ってほしい。



第二十一図

立花 松除真

除心の内草の花形 富春軒

松 梅 苔 椿 柘植 水仙 伊吹

晒木 枇杷 嫩 茗我

第三十図

立花 梅擬除真

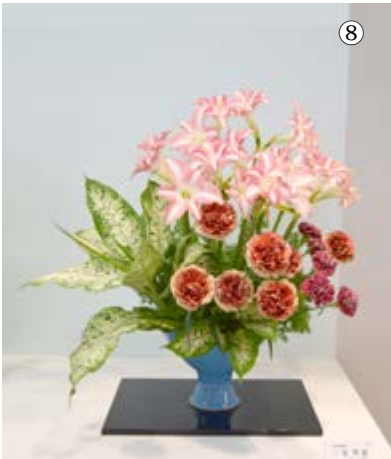
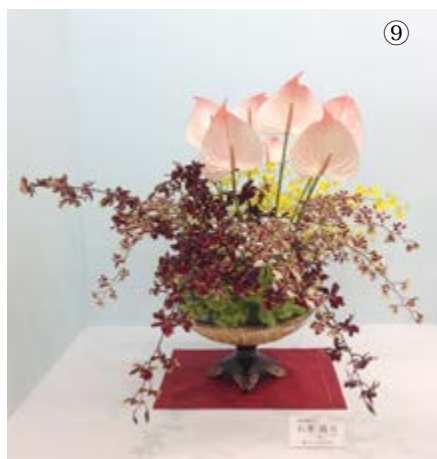
除心の内草の花形 富春軒

梅擬 柏 菊 小菊 椿 熊笹 伊吹

嫩 檜木

日本いけばな芸術中国展

会期 5月20日(水)～25日(月)
会場 そごう広島店





②



①



④



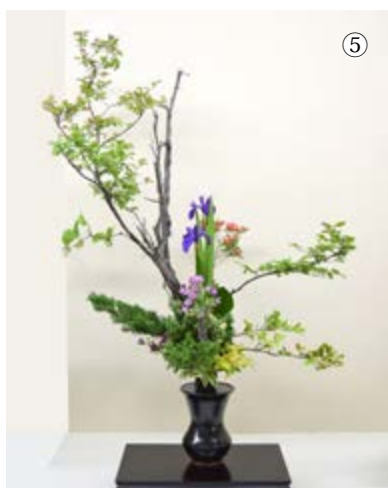
③



⑦



⑥



⑤

日本いけばな芸術中国展
会期 5月20日(水)～25日(月)
会場 そごう広島店





七竈生花

仙溪

日本いけばな芸術

中国展出品作

花型 生花 二種挿し

花材 七竈 鉄線

花器 御砂焼花器

私と上野淳泉先生（日本いけばな芸術協会・特別参与）は広島の「御砂焼」に花をいけた。

御砂焼は宮島焼とも神砂焼ともいい、古くから厳島神社参拝の際の縁起物として焼かれてきた。宮島の砂を粘土に混ぜて焼かれる。

私がお借りしたのは直径が30センチもある大きな器で、今回の花展のために特別に作られたもの。事前に器の写真を見て何をいけようか考えた。

花フジさんが用意してくれたのは見事な七竈。写真の水際で直径10センチ近くある。家でおよそのところまでさばき、新幹線でなんとか広島へ。花器におさめるのに手こずったけれど、ピタッと立ってくれた。

御砂焼が気に入ったのか、たっぷりの水が気に入ったのか、七竈は元気に葉をひろげてくれた。遅しく屈曲した幹には、過去にどんなドラマがあったのか。

桑原専慶流からは23名の出品だったが、岡山の先生方の「いい花をいけよう」という意気込みが嬉しかった。いろんな意味で、思い出に残る素晴らしい経験となったことに感謝している。



季節の洋と和 櫻子

カットガラスにいける

△10頁の花▽

花材 向日葵（菊科）

アンズリウム（里芋科）

ヒペリカム（弟切草科）

花器 カットガラス花瓶

宗全籠にいける

△11頁の花▽

花材 竹島百合（百合科）

珍至梅（薔薇科）

下野（薔薇科）

岡虎の尾（桜草科）

花器 宗全籠 手なし

10頁のガラス花瓶は口が広く、厚みがあつてかなり重い。このガラス花瓶も11頁の籠も、どちらも夏むきの涼を感じる器だが、一方は重量があり、一方は軽いので、おのずといける花もそれなりのものを選びたい。

ガラス花瓶にはアクリルの石を入れ、剣山を使って重厚な感じにしている。大好きな八重咲きの向日葵を主材に、臘脂色のアンズリウムと赤い実が可愛いヒペリカム。色の組みあわせを楽しんだ。さらに、明るい緑色を加えて、アクリル製のランチョンマットを敷いている。

宗全籠は江戸時代前期の茶人、久田宗全が作った置籠で、本来は篠の手が



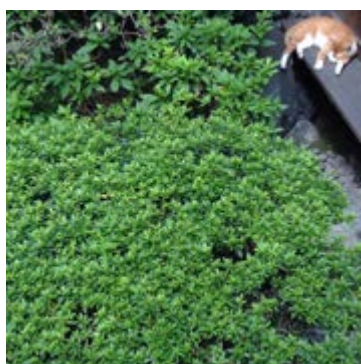
付いている。籠の中では安定がいい方なので、竹島百合もすっかり受け止めてくれる。その足元には軽やかな珍至梅、下野、岡虎の尾を選んだ。籠の雰囲気に合わせて野趣を感じる花で統一している。

両方の写真を見比べてみる。花器はそのままで、左右の頁の花だけを入れ替えたところを想像してみると、どちらも微妙な違和感を感じてしまう。重量的なバランスだけではなくて、自分が表現したい雰囲気との違和感。

表現したいものが何なのかはつきりしていれば、それにあった器を選ぶべきだし、花材のとり合わせもそれに随えばいい。洋花・和花という区別よりも、花の風情を統一することを心がけたいと思う。なかなか難しいけれど、とても大切なこと。

レモンだより

寝場所はどこでもいいわけではないらしい。彼なりのこだわりがある。





竹取物語

仙溪

ピンクのカンパニユラがあまりに可愛かったので、庭の篠竹で囲むようにいけて、かぐや姫みただなあと一人悦に入っている。

光が透けて見えるようなビュアな花である。蛸袋に感じる野の風情とは違う、はつらつとした美しさ。青いガラス花器にいけると、宇宙空間で咲いているようだ。その雰囲気をごわさないように、篠竹のいけ方を工夫している。

花材 カンパニユラ（桔梗科）

篠竹（稲科）

花器 ガラス花器

事故から4年4ヶ月

仙溪

インターネットができる人は是非「チェルノブイリ・ハート」という短編ドキュメンタリー映画を見てほしい。私はYou・Tubeで見つけて見る事ができた。

1986年に起こったチェルノブイリ原発事故が子どもたちに与えた放射能被害の実態を、事故発生から16年後に描き、2003年米アカデミー賞短編ドキュメンタリー部門でオスカーを受賞している。約40分、日本語の字幕がつけられている。

こういう話をいきなり日常の中でのするのは難しいので、ここに書かせて頂いた。ネットの世界には妖しげな情報が散乱しているが、監督のマリアン・デレオさんに深い人間愛を感じたので、私はこのドキュメンタリーで見たことが現実なのだと信じている。情報の見きわめに、発信者の人柄は重要な判断材料だと思っている。人を思いやる心を感じるかどうか。見て感じて、共に考えたい。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2016 年

7 月号

No.637

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ファーン（シダ類）

△表紙の花▽ 櫻子

花材 デイサ3種（蘭科）

アンブレラ・ファーン

（羊歯科）

擬宝珠（百合科）

花器 ガラス鉢

オーストラリアにはユーカリ、プロテアやピンククッション、リュカデンドロン、カンガルーパーのようなオーストラリア固有の花であるワイルドフラワーがあり、普段のお稽古にもよくいけさせてもらっている。又最近ではユニークなグリーンの種類も増えてきた。

ファーンと呼ばれるシダ類は原生林の高木の下に一面に広がるように自生している。

今回初めて使ったアンブレラファーンは輪生の広がりを持つシダで、日本の山野草にもよく似合う。そして大変強いので二ヶ月以上も取りかわせを替えて飾って楽しんだ。

南アフリカに自生するデイサという名前の蘭の花。これも海外から輸入されたもの。日本での栽培はともな難しい。斑入り擬宝珠を加えて三種でいけたが、それぞれが違和感無く馴染んでいる。

山の風情

△2頁の花▽

仙溪

花材

猿捕茨さるとりいばら（百合科）

百合「セラダ」やまあじさい（百合科）

山紫陽花やまあじさい（紫陽花科）

下野しもつげ（薔薇科）

花器

陶花瓶

この黄色の百合はセラダという名だが、一輪咲きに仕立てられて野の風情が感じられたので、山野草ととり合わせて投入にした。猿捕茨には棘があるが、この枝には無かった。南の方の浜猿捕茨は棘が無いので、掛け合せてあるのかもしれない。品種改良された花材といっても、これらのような山の風情を感じる物が手に入るのは嬉しい。

パイナップル

△3頁の花▽

櫻子

花材

パイナップル

（パイナップル科）

オクロレウカはまなるとりいばら（菖蒲科）

薔薇（薔薇科）

花器

赤色ガラス鉢

形は松笠に、味はリンゴに似ているところからパイナップルとアップルでパイナップルだそう。美容と健康に良い栄養素が多く含まれて、夏バテにも効果的。そんなパイナップルに感謝をこめて同系色の薔薇と盛花にした。オクロレウカをエネルギーギッシュに広げて。



夏櫨なつはぜ 姫百合 仙溪

花型 生花 二瓶飾り

主瓶

花材 夏櫨(躑躅科)

花器 白竹竹筒

副瓶

花材 姫百合(百合科)

花器 青白磁水盤

夏櫨なつはぜの名前の由来は、夏の内から櫨はぜのように葉が色づくところから来ている。

さて、この櫨はぜとはどんな木だろう。ハゼノキは漆科の落葉樹で、その果実が木蠟もろうの原料にされる。安土桃山時代末の1591年に中国南部から種子が輸入されたのが最初で、江戸時代の蠟燭ろうそくの普及に一躍買ってきつた。九州の島原藩ではハゼノキ栽培に力を入れて木蠟が特産品となり、現在も製造されている。

ハゼノキが日本に入る前から、日本に自生する漆科の多くをハゼと呼んでいたようだ。蠟ろうを採ったり、樹皮が染料にされたり、弓の材料となったり、もちろん漆を採ったり。そして秋にはほとんどが見事に紅葉する。万葉集にも一首、梶弓はじゆみの名前で詠まれている。

夏櫨のことを書くつもりが脇道へそれてしまったけれど、花の名前を調べる内にいろんなところへ辿り着くのも、いけばなの楽しみの一つである。是非皆さんも。

立花秘傳抄 一

常磐木之部 (つづき)

檜

祝言に用いる。苔晒共に付く。上にばかり、中にばかり、下ばかりも使う。これより奥上中下と有るは讀、副、見越、流枝、控に立てるなり。前置には大木の類は用いず。

訓蒙図彙に檜を図してこれ栢と名づく。本草綱目に云う、栢は側栢なり。数種有ると云々。順和名集の側栢日本の白檀と云々。未だ詳らかにあらず。

和名 さひ 富草とみ 幸草さいわい

天智天皇花尽異名

大内や名もむらさきのみつま草家作りえのかけそ久しき

蔵玉集

此時は四方も八角もおさまりて四つま草にも花は咲けり

古今

この殿はむへも富けりさき草のみつは四ツはに殿作りして

地はえ檜と云うは実植にして漸くようや五尺にたらず。出生直なるゆえ、正心に用いるはこの檜なり。



板檜これも小木にして葉のうらおもてなくひらめにかさなりありて、葉先丸く白檀の葉のごとくなり。自然に立ちたる木末こぎすえあらば正心にも用うべき。かこい、つや、ねじめなどに当代専ら之を用いる。



しよる檜と云うは、若木の小枝なるゆえ、横へは遣えども正心に用いず。これ立花第一の賞木にて、副、見越、つや、あしらいに指して叶わざるようにいまも古風にはこれを用いる。当代は初心の物にしてさのみ好まず。さりながら上手の檜つかいは下手の美花にはまさるべし。よくよく心を付て新たに指すべきなり。



檜しんは大木の枝を切りて葉つきよく、木つき面白を用いるなり。小木にはまれなる物なり。まずしんにはたらきある時はその勢いを流枝、或いは請にもたせ、板檜、しよる檜などの小枝をもつて水際へあしらいくだし、一所一所にはたらきを付け、又一瓶の内の檜をつかねて一本となして見る時、たがいに和合して景気面白ように指すべきなり。檜は花も咲かず葉も見事ならずといえど、立花の上にては第一の景物とす。初心巧者のわかちは檜にてよくあらわるる物なり。

柏かしわ

祝言に用いる。

上段中段苔付けず。

晒木は成る程ほそきを用いる。

心、請、副、控枝。

流枝にならず。

葉は水際までさげず。

本草綱目に云う、かい檨 唐韻云柏 藻塩草、ならの広葉 葉広柏 青柏

秋柏

わくら葉祝言に嫌う。

病葉とかきて、赤きはの虫のきしりて朽ちたるを云う。

柏は大木なりといえど、これ古法なり。然るに近代あまねく太きを用いるは出生を知らざる故なり。ある師の云う、柏の晒木は細き枝のところどころ皮の残りたるこそ、同木の景気もうつりて面白き物なりと云えり。

広葉の類一瓶に一色ならでは指さず。柏、枇杷、紫苑、ぎぼうし、だんとく、うこん草、朴の葉のような類なり。

柏の大葉水打つ時は、葉しだれて花のぐあいちがう物なり。茎を枝に結びつけて遣うべし。またよく水をあげさせんとならば、枝の皮目を一方削つて水へ入るべし。



左 草之對之花

寺田八郎兵衛

テキスト615号で掲載した立花図の一つに檜を真に使った立花があったので、再び紹介しておく。

第八十三図

立花 檜除真

左草の対の花 寺田八郎兵衛

檜 苔 梅擬 松 菊 小菊

熊笹 柘植 嫩 檜扇

師範会研修会

「立花講座」

会期 6月12日(日)

会場 京都プライトンホテル

講師 桑原仙溪

季節の花材で立花を一から立てるところを見てもらい、「役枝の名称」たぐだ「素戔たぐださんの教え」立花十徳

について解説した。

除心立花

花材

夏櫨 笹百合 珍至梅 躑躅

姫百合 岡虎の尾 紫先代萩

穂咲下野 釣鐘鉄線 羊歯

花器 青瓷花瓶(木村展之作)



この立花は「いけばなプレゼンテーション」に出品したものを元に一部花をかえて立てたもので、丁度、笹百合の時季だったので、山で笹百合に出逢った時の感動をもとに、山の草木を集めて立てている。水色の器に白、薄桃色、桃色、紫色、黄色の花が優しく乗った。

同志社大学通信

One purpose 187

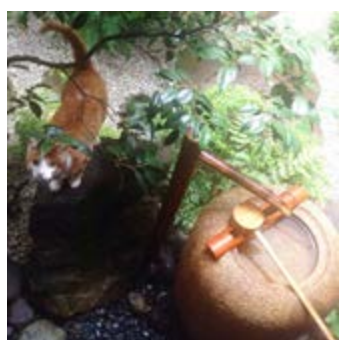
同志社人訪問

桑原仙溪さんに聞く

現役大学生のインタビューに答えて、私のいけばな観を記事にしていた。

「花と無心に向かい合うことの素晴らしさを、一人でも多くの人に伝え、日本が培ってきた自然を慈しむ心をよみがえらせ高めていく。それがいけばなの家元の務めだ。」

※この冊子をご希望の方は家元事務局にお尋ねください。





沢蓋木の立花

仙溪

日本 いけばな芸術展出品（5月）

花型 除真立花 下段除

花材 沢蓋木（灰の木科）

躑躅（躑躅科）

杜若（菖蒲科）

武蔵鑑（里芋科）

花器 龍耳銅花瓶

沢蓋木は名前のごとく溪流を覆うように枝を伸ばす木だ。初夏に白い花を咲かせる。花フジさんの山の畑にも小川の土手に植えられていて、晩夏に訪れた時には瑠璃色の実が沢山ついていた。

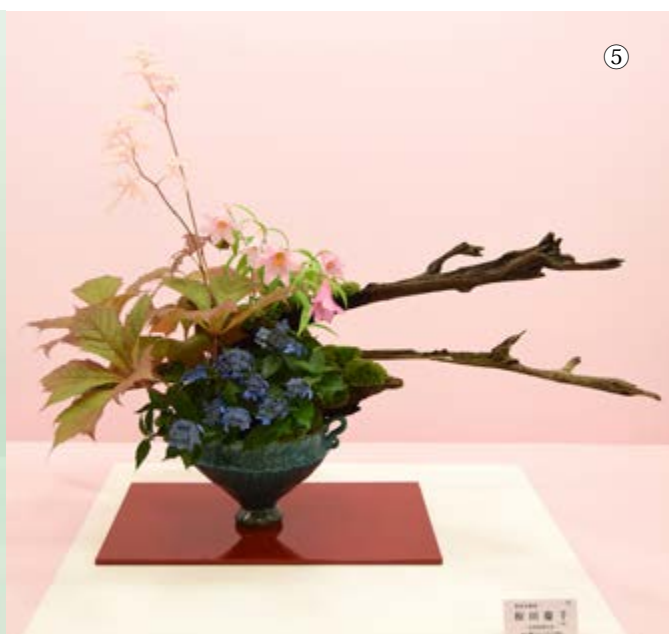
日本、朝鮮半島、中国に分布する落葉低木で、灰の木科、灰の木属の植物。灰の木の名前は、木を燃やした灰が染料の媒染剤とされたことから来ている。木にアルミニウムが多く含まれていることが、染料の色の発色や定着に役立つそうだ。現在のみようばんに代わるものだった。昔はこういう灰を専門に作る人がいて、植物のことをよく知っていた。現在でも陶芸家の中には様々な木の灰で釉薬を研究されている人もおられる。植物は灰になっても人の役に立っているのだ。ただし環境が汚染されたところで育った樹木は、灰の利用もできなくなるが。

さて、苔むした沢蓋木の枯木を、その曲がりや枝付きを生かしながら立てたのだが、真の出口が低い花型になった。山中の沢に杜若が咲き、躑躅が彩りを添えている。テンナンショウの仲間の武蔵鑑をのぞかせると、深山の景色ができあがった。



第 49 回 日本いけばな芸術展 テーマ「みらい、かける。」 5 月 11 日(木)～ 16 日(月) 大阪高島屋 7 階







出逢い花（30）

仙溪

満天星（躑躅科）
どうだんつじ

木槿（葵科）
むくげ あわい

花器 陶製鉢カパー（ベルギー）

湯呑みのように見えるけれど実は鉢カパー。植木鉢を部屋の中に飾りたいとき、プラスチックの容器のままだでは味気ない。そんな時のカパーとして大小いろいろな形で売られていた。ベルギー製で、黒陶に鮮やかな色の釉薬がかけられ、貫入がアクセントになっている。

ミニ鉢植用の器を二つ購入した時から、水が入れられるなら、対で花をいけようと決めていた。どんな花を出逢わせようか、そんな気持ちにさせてもらえるのは、きつと器の力だと思う。食卓や窓辺に飾るような気楽な花が似合う器。一輪の花でもお洒落に飾れる、そんな器に最近はずが行ってしまふ。

ドウダンツツジは大きな枝から小さな小さな小枝まで、器の大きさに合わせてどんな大きさにもいけられる重宝な枝だ。小さくいけると風車のような葉の姿がよくわかる。グレーの釉薬の方に翠をいけて、赤い方には底紅のムクゲを一本、器の口に乗るようにいけた。緑色の背景に置くと、白と赤が爽やかに薫る。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
7 月号
No.649

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七夕飾り

〈2頁の花〉

櫻子

花材 笹 (稲科)

鳴子百合 (百合科)

姫百合 (百合科)

桔梗 (桔梗科)

花器 濃茶色陶花瓶

七夕飾りは短冊に願い事を書いて笹に飾る行事で、五節句のひとつ。桃の節句や端午の節句のように祝う行事ではないが、その時々季節の行事を大切にしてきた日本らしい習慣だと思ふ。

家の南側の壁をきれいに直し、笹を植えたら良く繁ってくれている。それ以来、笹をいける事が多くなった。姫百合や桔梗の花も、笹といけると、七夕の星のように見える。

白斑が多くて珍しいナルコユリはまるで Milky Way (天の川)。



横から見た奥行き



広口花瓶にいける

△ 3頁の花 △ 櫻子

花材 美白百合(百合科)

胡蝶蘭(蘭科)

バンダ(蘭科)

クテナンテ(クズウコン科)

花器 デルフト花瓶

口の広い花瓶は、中に剣山を入れ、支柱を4本立てて十文字配りを固定しておくといけやすい。

お祝いのいけばなの参考に、白い百合と、ピンクの二種類の蘭のとり合わせでいけてみた。



横から見た奥行き

師範会総会・研修会

会期 5月21日(日)

会場 京都プライトンホテル

総会の後の家元と副家元による
自由花デモンストレーションでは、初夏の花材のいけ方を解説したが、特に「花器」の重要性についてお話した。家庭で楽しむ時も、ハレの場にいける時も、花器の選び方によって、花の表情が随分変わる。手間をおしまず、仕掛けを工夫することで、特別な器をさらに生かすことができる。



対のガラス花器にいける 仙溪

花材 花菖蒲2色 紫陽花3種
花器 ガラス花器2瓶(チェコ・モゼール)



緑と紺と金の花器にいける 櫻子

花材 きばなそけい 黄花素馨 ライラック 薔薇
花器 角形陶花瓶(フランスにて購入)



④



花材 芭蕉の葉 ヘレコニア
モンステラ 大小
グズマニア



レモンちゃん

ある夜、野良猫とケンカしておしりを負傷。その後、舐め壊して傷口がひろがり獣医さんへ。傷がふさがるまで、顔にエリザベスカラーというものを装着せねばならなくなりました。おかげで傷も小さくなってきましたよ。

勝^あげて計^かつべからず^かいいち数^{かず}え上げることはとてもできない。ケ様の^けこのよう^{よう}な。

立^り華^つ時^ま勢^{よう}粧^すを^が読^よむ (36)

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

椿

祝言。下段。

海石榴。

本草綱木(目のまがい)に山茶花といえる日本の椿なり。格古論^{かくころん}に曰く。一稔紅千葉紅千葉曰。この外勝^{ほかあ}げて計^かつべからず。

古歌

川上のつらつら椿つらつらに見れともあかぬとせの春なかぎりなきはこやの山は幾とせかしら玉椿しらす行くすえ。

椿古方に城中、又得道の祝いに立てず。そのゆえは、花おちやすき物なれば、落ちるといふ言葉^{ことば}をいむ故なり。すべて草木の花、ちる、しぼむ、落花、皆不吉の言葉ある時は、椿に限りたるも覺束なし。但し幾日ありても落ちざる様

に細工して、立てるときは、苦しかるまじ。

椿は太木にしてしかも大輪なる花、水ぎわに指すこと法度に背き、出生にたがうことはいかにぞや。一説に云う。椿は近代はやり出て、一輪二輪だにも大切の花なる故、木をおしみて長く切ることなし。故に水ぎわばかりに、遣いならわせりと云えり。然れども椿のみに限らず、木槿^{むくげ}、長春、花石榴^{ざくろ}、ケ様のたぐい古来より水ぎわに指す時は、前の説用^{せつ}いがたし。或る師の曰く。惣じて草木の景気高木といえど、高く指してあしきあり。大輪といえどひくく指して面白くあり。椿、長春、木槿などは前置、水ぎわに谷をかまえ、洞^{ほら}を作りて、二三花ほのかに立てたるこそ、気色^{けしき}もおかしく勢い有るといへり。誠に古人花道を鍛錬して、法をさだめ給う、その道理^{もつとも}尤奇なるかな。

椿は早咲き、冬の内、春、残花、四色の指し様あり。又花五輪三輪指すとも、花ことごとくはたらき有りて、よくみゆる用に指すべきなり。

然れども三輪遣う時、一輪かくれるは苦しからず。二輪かくるを嫌^{きら}つ。

椿は葉をもぎて、外の葉の見事なるを、借りて立てるなり。若ばえは、胴まであげても苦しからず。

赤き椿、白き椿、一瓶に遣う時は、二所にわけて指すべきなり。もし一所に立てることあらば、白きは白き、赤きは赤きと、花の縁、混乱せざるように立つべし。

椿は前置にかぎらず、三輪、又は五輪とも指す時は、胴作り、前置、ゆるやかに、或いは流枝、控枝の前をくつろげ置き、松、黄楊^{つげ}の木陰より、物にさわりなく、ありありと、見えるように指すべきなり。初学の時は、花形くつろがず、水ぎわせまるゆえ、大輪なる花遣うに、自由ならず。よくよく、工夫をなして指すべきなり。

椿を前置に用いるに、浮沈^{ふちん}の二つあり。花うく時はよく、しづむ時は、幽玄^{うくしづむ}ならず。且つ外の草木をも、前置に遣う時、この事あれども、椿に至りては、専ら肝要とす。

椿の葉に檉木の葉を借り用いる時、二三枚はくるしからず。花と借り葉とよく景気うつるよ
うに指すべきなり。

むくげの花に、椿の葉をかりて、椿の花と見る人もあり、木槿の花と云う人もあり、古来その論あるといえど、立花に借葉と云うことあれど、借り花と云う名目なし。古昔^{いにしえ}はおもとに、ほうづきを借り、天南星^{てんなんしょう}の実を借るといえど、当代これを大きに嫌う。むくげは、葉しおれやすきゆえ、椿の葉を仮り来たれり。むくげは、夏の景物なるを、しいて椿と見なさんは無下の事なり。

山茶花

椿に同じ。

椿（もしくは山茶花）は33の絵図に見られるが、すべて前置など、いわゆる下段の扱いである。そしてどの絵図の椿も存在感があり、窮屈な感じはしない。
第二十二図では前置に赤椿が使われている。梅は紅梅

で、その楚（すわえ・ずわえ）が真になっている。水仙の白い花がのぞき、副には黄花の枝垂れ枝が春の兆しを感じさせているが、山吹では季が合わないし、連翹でも早すぎる。黄^{おう}梅^{ばい}もしくは雲南黄^{うんなん}梅^{おうばい}であろうか。



第二十二図

立花 梅除真

除真の内草の花形 桑原半兵衛

梅 苔 黄梅 松 檜 椿

柘植 枇杷 伊吹 水仙

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』

（日本華道社刊）

※立花図一紙載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

（思文閣出版刊）



人々が花を愛で、お茶を愛し、香りを楽しみますが、京都に生まれ日本で発展してきた、いけばなもお茶も香も哲学にまで進化させたのは京都です。「はんなり」という言葉は、そもそも「花あり」です。花と人間の生き方、暮らしの美学と哲学を融合させ、花により人を育ててきた歴史や街づくりがあります。それを大丸さんが応援し続けてこられたのが、この華道京展でしょう。33もの流派が仲良く切磋琢磨し連携するのが、京都のすごさですね。

■桑原仙溪・京都いけばな協会会長
日本文化をリードしてきたのが、なぜ京都だったかと考えると、三万

大丸創業300周年記念鼎談 「京都の文化といけばな」

「京都は「いけばな発祥の地」と言われます。なぜ京都でいけばなが生まれ、その魅力が衰えずに続いているのでしょうか？」

■門川大作・京都市長 京都の歴史は精神文化と物質文化が融合し、心と物が刺激を与え合って進化してきました。その背景に人々の絆や自然との共生や宗教的情操があります。いけばなも、お供えする供花が原点ではないかと思えます。今、世界の

300周年。1717年、伏見で当時は小さな呉服商だったのですが、徐々にいろんなものを取り扱い百貨店となる中で「物」だけでなく「事」にも重きを置き、文化や芸術をお客様に提供しなければならぬという使命が出てきた。京都はいけばな発祥の地であり、この華道京展をどうしてもやりたかったのだと思います。徐々に参加する流派を広げて頂いた。全国の百貨店で華道展はいろいろやられていますが、33流派もそろうのはなかなかないです。

■門川 絶対ないですね。日本の華道の最高峰じゃないですか。

■丹羽 33流派の方たちが切磋琢磨しお客様を楽しませて頂いている。これからも文化、芸術の中心地である京都において、大丸京都店はこういう事業に力を入れていきたい。文化庁が京都に来ることを考えると、一層力を入れなければならないと思います。

「いけばなの未来や可能性についてどうお考えですか？」

■丹羽 寺社仏閣が京都ほど多い都市は、世界でも稀です。その信仰の中でお花が脈々と受け継がれてきた。いけばなは人に安らぎを与えます。京都は世界でも尊敬される街です。来店される外国の方が増えています。物だけでなく芸術や文化にも興味を持たれている。今後京都の文化の良さを世界の方々に紹介できるよう、微力ながら貢献できれば

と思っています。

■桑原 今年の正月から大丸京都店では、ダウン症の書家と画家による「共に生きる展」が開かれましたが、これからの時代は共に生きることが大事だと感じました。先日、染織家の志村ふくみさんが自然を尊ぶ気持ちと自然の恵みに感謝する心を育てる仕事していきたい、と言っておられました。まさに、いけばなもそうです。花を選び、器を選ぶ時に感じるのは、人と同じだということです。最初は苦手な人同士でも段々と気持ちに通じ合う。いけばなも回を重ねると、花の方から心を開いてくれる。自然と心を通わせることを、人と心を通わせることにつながって頂きたいと思えます。社会でいけばなを生かす場を、皆さんと一緒に作ってきたい。ドイツで花を生けていると、言葉の通じない人たちとも花を通じて心を通い合わせることができました。東北の被災地でも一緒に花を生けている中で打ち解けることができました。お花はそういう力があります。

■門川 世界を見ると、争いや環境破壊など心を痛める問題があります。日本人が大事にしてきた心を再認識せねばと思います。自然を尊び自然に感謝する。人も自然と共に絆を大切に生きる。よく京都のお勧めの観光の場所は、と聞かれると、京都の街はどこでも御地藏さんがまつられていて、きれいな水と生花がお供えしてある、と言って紹介します。世界に宗教都市はたくさんあり

ますが、街の至るところに御地藏さんがまつられているような街は他にありませんね。日本の文化のすごさは暮らしの中、衣食住と地域社会の中にあります。ヨーロッパ文化は上流階級のものだったと言われていた。明治維新の頃に日本の識字率は9割を超えていた。ヨーロッパは5割。日本は、暮らしの中に文化があり、字を教えた。花も教え、長屋の小さな家でも花を生ける場所が暮らしの中にあつた。でも床の間がなくなったりして、花を生ける所がなくなってきた。家の中に花を生ける場所を復活させられないだろうか、と思っています。

「今回の華道京展は、大丸創業300周年を記念して特別展示もあるのですか。」

■丹羽 大丸は創業者の「先義後利」という言葉を社是としてスタートしました。その言葉の本質をもう一度見極めたいと思っています。顧客第一主義と社会的貢献の意味を噛みしめて、京都の方々に支持されて何とか300年やってきた。何か恩返し、貢献ができなにかという思いがございます。大丸の300周年のテーマは「不易流行」です。芭蕉の俳諧の理念で、古い歴史の中にも新しさを取り入れていくという意味だと思うのですが、それはいけばなにも通じるものがあると思います。それをテーマに打ち出しながら、68回目の華道京展を華々しく開催するとともに、今後も京都のために頑張ってまいりたいと思います。



映画「花戦さ」

映画「花戦さ」はもうご覧になっただろうか。池坊専好（初代）が主人公となって、千利休や豊臣秀吉と、いけばなを通じてどのように関わったかが描かれている。

映画の中では、「立花」を中心に、様々な花をいけるシーンを観ることができる。当時の人達がどんなふうに花をいけていたか、とりわけ専好が花をいける心のありようが、ひしひしと伝わってくる。

専好は野村萬斎さんが演じている。佐藤浩市の利休との会話が特に印象に残った。まだの方は是非。

七竈の生花

ななかまど

△9頁の花▽

仙溪

花型 草型 副流し

花材 七竈（薔薇科）

花器 銅製手付花器

よく葉の茂った太枝一本を捌いていけた。足元の太いところを最初に入れ、その後ろから枝を出してゆく。



横から見た奥行き



太陽がいつぱい

△表紙の花▽ 仙溪

花材 ヘリコニア・プシッタコル

ム(里芋科)

向日葵(菊科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 ガラス鉢

最近のヒマワリは、俯^{うつむ}かないものが多く、前方へ出すことができる。ミリオクラダスでヒマワリを支えた。



横から見た奥行き



木瓜の立花 〆10頁の花〃

京華会・朝倉慶佐出品作

花材 木瓜（薔薇科）

杜若（菖蒲科）

下野2種（薔薇科）

松（松科）

イボタノキ（木犀科）

花器 銅立花瓶

太い見事な木瓜である。朝倉先生が出品されていた時は、薄紅色の花が賑やかに咲いていた。撤花後、花は落ちてしまったが、写真に撮らせていただいた。真から分かれた副の下がり枝と、右側に張り出た請の枝が、絶妙なバランスを作っている。

鉄砲百合の立花

〆11頁の花〃 仙溪

花材 鉄砲百合（百合科）

トルコ桔梗3色（竜胆科）

カーネーション2色

（撫子科）

オクロレウカの葉（菖蒲科）

鳴子百合（百合科）

スモークグラス（稲科）

花器 白黒陶花瓶

草花だけで立てた立花。洋花であつても、同じような環境に咲く植物を組み合わせると、自然な趣の立花になる。



スモークツリーと祭り寿司 櫻子

花材 スモークツリー（漆科）

柏葉紫陽花（紫陽花科）

レナンセラ（蘭科）

花器 練り込み陶花器

梅雨に入る少し前になるとスモークツリーが咲き始める。不稔花（種を結ばない花）の軸部分（花柄）が長く伸びて羽毛のようになった時が一番の見頃となる。

ヨーロッパ、ヒマラヤが原産地で乾燥気味を好むので、日本の梅雨時分に咲くのは迷惑だろう。雨の中ではなかなか爽やかな羽毛になりにくいと思う。

岡山のお弟子さんも庭にスモークツリーを育てておられる。風通しと日当たりの良い場所に植えておられるので、のびのび育っている。

6月の中旬には、スモークツリーを主材にしたお稽古を、もう2年通してさせてもらっている。庭の木を切ると、新鮮で枝ぶりも選べて、何よりもきれいな葉が付いてきて、活き活きとしたいけばなになるのが有り難い。切るときに樹液が出るが、松ヤニのような香りがする。ウルシ科の木だが、かぶれないようだ。

今年のお稽古は切りたてのスモークツリーに紫陽花やエレムルス、ギガチンウムなど、カラフルな花を一本ずつ合わせてみた。ふわふわした雲の中に、初夏の花が気持ち良く咲いているような花になった。スモークツリーには明るくて派手な花が合うように思う。

いけ終わって鑑賞した後は、家で作られた祭り寿司でもてなして下さる。ちらし寿司の上にモガイやエビ、サゴシなど、岡山ならではの具が10種以上盛られる。京都の地味ならし寿司とは違うな〜いつも感激して頂戴している。

来年も又スモークツリーがのびのびと育ってくれます様に。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
7 月号
No.661

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ケンちゃん

「6月6日はいけばなの日」とは、何事も6才のその日に稽古を始めるというという故事からきているが、甥の健一郎（ケンちゃん）が素子先生（ホッホちゃん）にいけばなを習いだしたのは3才だった。毎週月曜日の夜、お弟子さん達に混ざって花をいけていた。その間「テキスト」に連載された「ホッホちゃんとケンちゃん」の頁も、皆さん楽しみにして下さっていた。

その彼もこの秋には22才になる。スポーツが好きな好青年。家では女性軍によく怒られているが、そんなことではへこたれない。明るく優しいのが取り柄のようである。そして近頃、自分にとっての「いけばな」を見つめなおしているようだ。

竹島百合

△2頁の花▽ 櫻子

花材 夏檻（躑躅科）

竹島百合（百合科）

撫子（撫子科）

花器 手付竹製バスケット

子供の頃、母と市場へ行く時はこんな面白い物籠だった。今は季節の草木をざっくりいけて楽しんでいる。爽やかな初夏の籠花。



横から見た奥行き



アメリカ手毬下野

△3頁の花▽ 櫻子

花材 アメリカ手毬下野(薔薇科)

向日葵(菊科)

花器 陶水指

生活雑貨を扱う店で大きな水指を買った。安定がよく、実になり始めたアメリカテマリシモツケも大きな枝を伸び伸び挿せる。ヒマワリ2種を合わせると同系色の濃淡が美しい。

横から見た奥行き





スモークツリー

△3頁の花▽ 櫻子

花材 スモークツリー（漆科）

薔薇（薔薇科）

花器 ヘレンド窯花器

スモークツリーは小さな花が咲いたあと、結実するのはほんの僅かで、殆どの花は散った後花柄を煙状に伸ばして実を守るように取り囲み、やがて実と共に風に乗って飛んで行く。子孫を残すという目的のため、それぞれが役割をしっかりとこなしている。

そんな事を知ると、スモークツリーが愛おしくより美しく見えてくる。その美しさを長く保ってほしいから、水揚げを充分にするようにしている。水の中で足元を切る。足元を割っておく。足元の皮を削る。つけた後も時々は切り直す。

ピンクのバラと赤いスモークツリー。ハンガリーの名窯、ヘレンドにいくると、気分はヨーロッパ貴族。

横から見た奥行き



立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

みむらさき

祝言上中。心にも用いる。

つる水木

祝言上中。心に用いる。

えびついでばら

非祝言。水ぎわ。

仙蓼せんりょう

祝言。水ぎわ。

下野

祝言水ぎわより中迄上る。

きじの尾

祝言。水ぎわ。

第六十図

立花 松除真

西村松庵

松 藤 苔 伊吹 柘植 躑躅 小羊齒 嫩

藤が使われた立花図5つのうち残り2つを紹介しておく。第六十図の真の松の異形さには目を見張る。こんなに曲がった松が本当にあったのだろうかと思いが、実際の自然は変化に富んでいる。おそらくこのような姿の松があったのだろう。「草木自然の形をそのままに」使い、役枝やあしらいを工夫して呼応させ、それにびつたりの器で受け止めている。中から仙人が出てきそうだ。



しのぶ

非祝言。水ぎわ。

矢筈やはす

祝言。水ぎわ。

磐梨いわなし

非祝言。水ぎわ。

がんそく

非祝言。水ぎわ。

白丁花はくちやうけ

水ぎわ。

岩檜葉いわひば

祝言。水ぎわ。卷栢いわひば（多識）。

異名。万歳ひやうそく。豹足。長生不死草と云う。

ひとつば

非祝言。いわかしは。石葦せきい。



第六十三図

立花 苔除真

服部三郎右門

藤 苔 松 躑躅 柘植 著我

第六十三図は苔のついた枯れ松の真が立ち昇り、内副に松とそれに絡まる藤の花が美しく優しい曲線を見せている。超然とした六十図と比べてみると面白い。

次頁に通用物の竹の項目に続いて書かれてあった熊笹が使われた二株砂物（第三十八図）を載せておく。特徴のある砂鉢に腰低く丁寧につくられた風景。自然の息吹を見つめる眼差しが感じられる。

荔枝^{れいし}

祝言。水ぎわ。五色の物あり。砂の物ばかりに用うべし。

薔薇^{しょうび}

祝言。水ぎわ。順和名集に波々良、草の部に入。

本草綱目に云う、この草蔓柔らかく牆に依り援けられて生ず、故に牆靡となつくと云々。立て様、椿に同じ。

右通用の出生、和漢の証文明らかなり。通用に二義あり、出生と景氣となり。藤、竹、牡丹、萩、南天の類は出生の通用なり。景氣の通用と云うは、小しだ、忍^{しのび}、きじの尾の類は山草にして、常に木にまじわり生えるゆえ、景氣を以て通用とす。この類数多^{あまた}あり。なぞでらえて知るべし。

立花秘傳抄二の終

第三十八図

二株砂物 伊吹真

桑原次郎兵衛

伊吹 梅 苔 水仙 嫩 椿 熊世

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）



桑原次郎共衛



京都いけばなプレゼン
テーション2018

△9頁上の花▽ 桑原仙溪

花材 太蘭（蚊帳吊草科）

ゴールドエンココ椰子

（椰子科）

アランセラ（蘭科）

糸芭蕉枯葉（芭蕉科）

モンスセラ（里芋科）

花器 陶大水盤（ザールバーク作）

△9頁下の花▽ 秋山慶淑

花材 ストレリチア（芭蕉科）

ニューサイラン（竜舌蘭科）

花器 白黒陶花器（竹内眞三郎作）

「すこいゾ！いけばな 華道家によるフェスティバル」と題して、花展に加えて様々なイベントを行った。大先生も若手も、いけばなの魅力を伝えたいという思いは同じ。そしてアクションによって自分達の経験値も上がる。ご来場の皆さんがいけばなを始めて下さいますように。





日本いけばな芸術特別
企画 in 彩の国さいたま

金沢21世紀美術館で開催された特別企画展から8年ぶりに、様々なイベントを盛り込んだ展覧会がさいたま市の埼玉会館で行われた。

立花、生花、投入、盛花などの様式ことの展示や、実、葉、根など花材ことの会場構成になつていて、観る人にいけばなを色んな角度から知ってもらおう仕掛けになっていた。

また、杜若の葉組や三管筒の生花などの実演をじっくりと解説つきで見ることが出来たり、私達花道家にとっても大変貴重な勉強をさせていただいた。(写真①)



養護学校の生徒達と、女子サッカー選手のいけばな体験の様子が会場で常時上映されていた。(写真②③)





裏白の木

彩の国さいたま出品作

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型

花材 裏白の木（薔薇科）

花器 陶コンポート（宇野仁松作）

裏白の木の緑白色の葉色が会場で見目を引いていた。

古典いけばなは型が決まっているが、その中で花材の個性をどう生かすかが問われる。厳しい自然の中で育った逞しい枝には風格が備わる。それを損なわないように型にはめるのが難しかった。

アガパンサス

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花

花材 アガパンサス（彼岸花科）

花器 ブルーガラス花器

（バーティル・バリーン作）

アガパンサスの花は型通りに配置すると葉と重なってしまうので、胴と留の代わりに真圓と控に入れている。青いガラス花器と合っている。

横から見た奥行き





陶のランプ

素溪（健一郎）

花材 ガズマニア・ディステイフロー

ラ（アナナス科）

モンステラ（里芋科）

花器 サボテン型陶製ランプ

私、『ホッホチャンとケンチャン』のちっちゃかったケンチャンは昨秋21歳になりました。

最近、「花あそび」と題して様々なものと生け花を掛け合わせて、現代における新しいいけばなのあり方を模索しています。

祖父と祖母の花あそびは、私の身の回りにある好きな物を使って花と掛け合わせていくものでした。幼く花にさほど興味のない私の目から見ても目を引くものがあり、花に興味を持ったことを覚えています。

生け花に興味のない方にも、私と同じように花以外の入り口からでもいいので、生け花の道に巻き込んで行きたいと最近強く思うようになりました。自分なりの解釈で様々なものと生け花を掛け合わせる事を楽しんでいます。

写真は友人が作った陶のランプです。明かりの代わりに花で命を吹き込みました。



インスタグラム
(@ken161022)



いけばな写真を
投稿しています！

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
7 月号
No.673

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





午前9時半には皆さん立て終えるほどの手早さ。おにぎりとお汁をご馳走さまでした！

流枝会りゅうしかいの河骨こうぼね 仙溪
倉敷の上野淳泉先生宅での「流枝会」に健一郎が初参加して、河骨の立花を習ってきた。実は私が流枝会で初めて教えて頂いたのも河骨だった。35年前のテキスト253号にその時の様子を写している。
今回、私も一緒に上野先生の指導を受けることができた。私達2人にとって、大切な一日になった。



ギガンチウム

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アリウム・ギガンチウム(百

合科)

グロリオサ(百合科)

アルストロメリア(・科)

花器 ガラス花瓶(スウェーデン

赤と白で紫の鮮やかさが増した。



ヘリコニア

△3頁の花▽ 櫻子

花材 ヘリコニア(芭蕉科)

向日葵(菊科)

スモークツリー(漆科)

花器 ガラス花瓶(フィンランド)

ヘリコニアの名前はギリシア神話の芸術と学問の女神ムーサが住む「ヘリコン山」に因む。





檜扇の生花

仙溪

花型 生花 行型

花材 檜扇 (菖蒲科)

花器 練込陶水盤

「古語拾遺」の中に、ヒオウギ

の古名「烏扇」が出てくる。昔、

神代に大地主神が田をつくる際

に、御歳神の怒りによって苗葉が

枯れてしまった。その祟りを去ら

せる方法の一つに「烏扇を以て扇

げ」と告げられ、そのとおりにし

て苗葉は茂り、年穀も豊かに実つ

た、という内容だ。風をおこせる

姿形と、花のあとにできる漆黒の

実(射干玉)に神秘の力を感じて

いたのだろう。

おそらく貴族が厄除け魔除けの

ために、烏扇に似せて作ったもの

を身につけていようとしたのが檜

の板で作った檜扇なのだと思う。

だとするとこの花があつたから

扇子や扇が生まれたとも言える。

京都の祇園祭には昔からヒオウ

ギをいける習わしがあるのも、疫

病退散の願いが込められているの

だと納得がゆく。平安を願ってヒ

オウギの生花をいけた。





杜若と河骨の立花

表紙の花 健一郎

花型 立花 杜若 一色 除真

花材 杜若 (菖蒲科)

河骨 (睡蓮科)

花器 陶花器

先月のお生花に続き今回は杜若の立花を立てた。まだまだ拙い立花だが、自分の力は出し切れているのでそんなに悲観的でもない。むしろ満足しているとも言えるだろう。ここ最近大切だと思っていることが一つある。花との思い出だ。数ある花と自分だけの思い出を作っていく。今回の杜若は、大田神社に行き写真を撮ってその後5月末までスマートフォン待ち受け画面にした(右の写真)。

河骨は岡山の池で朝早くから採取する所を見学させてもらった後、岡山先生と立花を立てた。蓮根農家



斜め横から見た奥行き

二足の草鞋

健一郎

今年の5月からもう一足草鞋を履くことにした。一足目はいけばなの先生。二足目は介護の職員だ。融通のきく非常勤で雇ってもらっている。一足目をより追求するための二足目の草鞋だ。

花と向き合う時によく考えてしまうテーマが2つある。「美」と「命」だ。

お花と向き合った時に感じる感情のうちの一つである「美しい」という言葉。美しいってなんだろう。よく考えてみるとこの言葉のあやふやさに気づく。綺麗なだけでは美しいと言えない。可愛らしいだけでも美しいではない。漲る生命感(みなぎ)だけでもない。様々な感情が幾重にも重なり合って生まれてくる感情ではないだろうか。花の美しさを存分に引き出せる華道家になりたいと考えている私は、美しいとは何かという疑問にぶつかった。

そもそも考えられるほどに美を知っているのだろうか。とりあえず美と身体で向き合ってみることにした。まず初めに美しいとされているものを片っ端から体感する事にした。オペラのコンサートに行ったり建築物、絵画など沢山の洗練された綺麗なものの身に着いたことがある。各分野の

洗練された作品は、ある一定のレベルを超えたものは素人目に見ても素晴らしいものである。そして、自然と向き合ってきたものであることが多い。全てのものは元を辿るとほとんど全てが自然の物に帰着する。陶芸でもそうだ。土、水、火と真剣に向き合った方の作品には他には無い凄みを感じる。人為的な作為が見え透いた作品はどこか凄みに欠ける。作品に飽きの来ない豊かな興行が必要なのである。それは人的な作為が見え透いた作品よりもより、自然らしい作品の方が飽きの来ない豊かな興行を持っているのではないだろうか。

幼い頃より綺麗なものに囲まれて育った私は自分の美的感覚を持つてはいるが、汚い物への耐性は皆無だ。副家元曰く、食事中に一言でも汚い言葉を誰かが発してしまうだけで食欲が失ってしまう子供だったらしい。でも介護の現場ではそんなことは言ってもらえない。ご家族が諸事情で世話できなくなった高齢者の生活の手助けをするのだが、今までの人生の中で一番人間というものに向き合えている。綺麗なものを見て培った美的感性だけでは厚みが無く、美しいと感じている。美を大きく捉えることができる。

2つ目のテーマが「命」である。

高齢の方を対象としているだけあって命と向き合う時間が多い。幼い頃から死については祖父と議論をしていた事もあり好きな時間でもある。だが何度考えても死が謎だという事が分かるだけだ。生け花をしていると幾度となく命と向き合わせられる。命という物が少しでも分かれば自分の作品に大きな影響が与えられるような気がしてならない。どこか根源的な美しさが引き出せるかもしれないと睨んでいる。

「美」と「命」の観点から介護職の魅力について話してきたが、介護職の魅力はこれで収まりきらない。介護職員の方達の人柄の良さも魅力の一つだ。介護業界の人達のホスピタリティあふれる行動と笑顔にはいつも驚かされる。相手に対する気遣い、配慮、全てが高い次元でなされており、息を吐くように人を承認する。そして、尊老の方と接する機会が多いことも魅力だ。長い人生を歩んでこられた方達の幾度とない忘却にさらされ、風化されたアイデンティティから学ぶべきものは少なくないはずだ。これだけ書いてもまだまだ書ききれないほど楽しい職ではある。

どういう風の吹き回しか、弟の順之助も介護の職につくらしい。家の大人3人は認知症になったら手厚いケアをしてもらえると喜んでいる。

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

寒菊

祝言。水際。

霜見草。秋無草。残り草。

藏玉集

幾代へし松の木陰の霜見草うへけるととき

をたれも知らねは

水仙一色の前置に必ず用いる。口伝。

われもこう

祝言。上中。

かるかや

祝言。上中。

この二草を通用に遣うは誤なり。

おほなこか草かる岡のかるかやはしたお

れにけりしとろもとろに

このふた草は、花も咲かず冬もなければ、た
おやかに幽美にして名高き草なれば、木にあ
しらひ、草にまぜてつやとなり、色と成りて
景気面白き草なり。指す人よくよく心を付く
べし。

第五十七図

立花 松除真

圓音

松菊 小菊 梅擬 晒木 柘植

柏 熊笹 嫩



圓音

粟

祝言。上中。

食物は立花に嫌うといえど、粟はやさしき物にして古来草花立てなどに用いる。常の花にはさのみ好むべからず。

古歌

ちはやふる神のやしろのなかりせは春日
の野へに粟まかましを

駒つなぎ

祝言。水際。

異名、狼牙。ろうが

沢ききよう

祝言。水際。

かよふの出生ひくく横へばかりはゆる物は、
水際によこへばかり長く出しても苦しく
らず。

花材解説もあと少しとなったので、掲載できていない立花図を紹介していく。第五十七図はおもに松と菊と柏で構成されているが、特に控枝の松の太さが目を引く。

第八十九図は「立花時勢粧・下 秘曲の図」の内の「松の前置」の立花図である。葉の短い、いわゆる良く締まった松を水際だけに使い、中段から上は檜の世界となっている。松の後ろに広がる幽玄の世界という趣である。ここでも控枝（定位置とは逆側）がいい味を出している。立花時勢粧の立花図には、控枝に重点を置いたものが少なからずある。作者の意図を想像するのが楽しい。

第八十九図

立花 檜除真

（松の前置） 富春軒

檜 晒木 沢水木 水仙 松 苔

枇杷 檉木



京都美風

新しき次代 いけばな展
第4期 (写真③)

会期 5月18日(出)〜24日(金)

会場 京都駅ビル2階広場

出品 桑原仙溪

花材 オクロレウカ (菖蒲科)

アンスリウム (里芋科)

ジャングルプッシュ (里芋科)

花器 陶大水盤 (ザールバーク作)

新元号を祝し、京都駅でのイベントに花を添えさせてもらった。



日本ポーランド国交樹立

100周年記念現代美術展
オープニングセレモニー

会期 5月18日(出)

会場 二条城二の丸御殿唐門前

挿花 桑原仙溪

花材 大手毬 (忍冬科)

グロリオサ (百合科)

花器 陶花瓶 (竹内眞三郎作)

日本とポーランドは国旗の色が同じだ。赤と白の花に両国の友好と祝賀をこめた。(写真④)





水生植物

仙溪

花材 太蘭（蚊帳吊草科）

糸芭蕉（芭蕉科）

アランセラ（蘭科）

花器 陶水盤

豊を編む材料となるイグサ科のイグサ（蘭草）も、そのイグサに似るカヤツリグサ科のフトイ（太蘭）も水生植物である。

水中や水辺に生える水生植物は、その生育環境により5つに分類されている。

湿地植物…ミズバショウ、イグサ、サワギキョウ、サギソウなど。

抽水植物…アシ、ガマ、ハス、フトイ、カキツバタ、ミズアオイなど。

浮葉植物…スイレン、アサザ、ヒシなど。

浮遊植物…ホテイアオイ、ウキクサなど。

沈水植物…バイカモ、クロモ、セキショウモなど。

イグサ以外にもフトイやガマは編んで筵や敷物に、アシは簾に利用されてきた。ハスの蓮根やヒシの実は食用に。水生植物と人との関わりは多岐にわたる。





ホワイトレースフラワー

仙溪

花材 ニューサイラン(竜舌蘭科)

薔薇(薔薇科)

レースフラワー(芹科)

花器 陶コンポート

ホワイトレースフラワーは地中海沿岸原産の初夏の花だ。日本のセリ科植物とよく似ている。夏のいけばなのアクセントに。



乞巧奠とカジノキ

キイチゴの名前で出回っている植物は正確にはカジイチゴという名前である。バラ科キイチゴ属の落葉低木でおもに西日本に分布し温暖な氣候を好む。白い花が咲いたあとにできるオレンジ色の実は食べられる。

漢字では「梔苺」または「構苺」と書くが、クワ科のカジノキに葉が似ているのでこの名がつけられた。

カジノキは古代から神木として尊ばれ、神事の供え物の敷物に使われた。樹皮はコウゾと同様に製紙原料となる。

中国の「乞巧奠」という行事が奈



良時代に日本に伝わった。牽牛・織女けんぎゅう・しよくじよの二星が天の川を渡って逢う陰暦7月7日に、手芸・裁縫などの技巧上達を祈る。この時、カジノキの葉に願いを書いて、七夕飾りの短冊として使われた。

木苺きいちごと薔薇ばら

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 木苺「構苺」かいちご（薔薇科）

薔薇（薔薇科）

花器 小判型陶水盤

近年、カジイチゴの栽培が増えてきたように感じる。枝を選べば生花にできるし、夏の暑さにも強いのが有難い。

レモン日より

猫目線で撮影中の健一郎。





パイナップル

桜子

花材 ミニパイナップル（パイ

ナップル科）

グラジオラス（菖蒲科）

アロカシア（里芋科）

花器 ガラス鉢

パイナップルにはプロメラインというタンパク質分解酵素が含まれていて、食後に食べると消化を助けてくれる。また、まるごと買った時に残った芯は、刻んで肉と漬け込むと固いステーキが柔らかくなってくれるので役立っている。

そんなパイナップルへの親しみを込めて、優しいピンク色のグラジオラスと、個性的なアロカシアの葉をとり合わせ、青いガラスの器にいった。見ていると元気をもらえる、そんな盛花。アロカシアの茎は見た目より弱いので、太めの針金を添わせて茶色のフローラルテープで巻いておく。場合によっては葉裏にも針金を這わせておくといい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
7 月号
No.685

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





路地にいける

△表紙の花▽ 健一郎

背景 富春軒の路地

花材 大山蓮華(木蓮科)

鞍馬岩(岩檜葉科)

花器 弥生土器

一家総出で露地の砂利を磨く大掃除をした。20年ほど前に大工の人達に依頼して以来との事。家族全員がまとまって掃除できた事に感謝している。石畳に水を打つとピンと空気が引き締まる。今までできていなかった面倒な事、そして基盤を固めるために時間を使う事ができた。何が起こるか分からないのが世の常ではあるが、ある程度の事は受け流せるよう備えておく。

写真の土器は去年の7月25日に東寺で購入したものだ。原始的な植物と合わせたかったのだが、花に巡り合う機会がなく一年ほど経ってしまった。咲く前の大山蓮華と水を多分に含んだ光るシダに弥生の土器がよく似合う。

初夏の香り

△2頁の花▽ 櫻子

花材 深山南天(薔薇科)

杜若(菖蒲科)

笹百合(百合科)

花器 フランス製青練込陶鉢

過去の「テキスト」では白黒写真だったので、カラーで再掲載。カキツバタの雅な色と、ササユリの優しい色は、白黒写真では伝わらない。

このササユリは奈良の知人が種から育てたものをいただいた。その時聞いたところによると、ササユリは生育が非常に遅く、一年目は一枚葉がやっとと発芽するだけで、開花には7～8年かかるそうだ。

私たちがいける花には、それぞれにドラマがあると思うと、愛おしく、大切にしなければと思う。

四季咲きのカキツバタと軽やかなミヤマナンテンをとり合わせた。

高さを抑えて、枝の広がり的印象的に見せた。

(2006年7月 517号より)

蔓をいける

△3頁の花▽ 仙溪

花材 熊柳(黒梅擬科)

薊(菊科)

京鹿の子(薔薇科)





撫子（撫子科）
なでしこ
 鳴子百合（百合科）
なるこゆり
 花器 陶花器（木村展之作）

クマヤナギは日本の山地に生える落葉する性木本で、クロガネカヅラの別名がある。つるの先の房は、去年咲いた花のあとにできた実である。地味な花材なので明るい野の花を合わせた。

クマヤナギはぐにやぐにやでいけにくい。細めの背の高い花器がいけやすそうだが、あえて口の広い花器にしてみた。

花器に写真のような仕掛けを入れておき、つるにも長い棒を固定していけている。バランスをとるのが難しいが、重みのあるつるを軽やかに見せることができた。





こころは異国へ

△ 4 頁の花 ∇ 櫻子

花材 ギガンチウム（百合科）

煙の木（漆科）

レリア（蘭科）

花器 陶花器（宮本博作）

今年も又新鮮なスモークツリーを
いける事が出来た。岡山へは行けて
いないけれど、お弟子さんが箱詰め
にして送って下さった。日当たりが
良く風通しの良いお庭で、手入れを
して大切に育てておられるので、年
毎に大きく豊かにスモークしている
ようだ。

毎年お稽古させていたくのが楽し
みで、薔薇や向日葵、柏葉紫陽花
など季節の花を取り合わせている。
今回はギガンチウムと、カトレアに
似たレリアという細くて繊細な蘭と
合わせてみた。

赤い花器にモロッコ刺繍の敷物
で、異国にいる様。今は何処にも行
けないけれど、こんな風に楽しんで
いる。



『二七モノ』

健一郎

確か、先々月のテキストで、ホンモノについて少し考えてみた。大雑把に要約すると、あまり難しく考えずに頭を空っぽにして物事と向き合えると本物の作品の本質が見えるのではないかという話だった。この考えには、作品に本物と偽物があるという考え方が根底に流れているわけだが、今回は日本の偽物とも思われているかもしれない、面白い文化について考えてみようと思う。

偽物と誤解を恐れずに言ったが、どうも世界から見ると珍しい文化がある。「写し」というものである。「写しは模倣であつて創造ではない。」「単なるコピーだ。」「盗作とどう違うのか。」と言われることもあるが、私はどういった意識で先人との作品と向き合ったかの違いであると考えている。その意識を大きく分けると「盗作」「学ぶ写し」「残す写し」「祈る写し」が存在していると考えている。

この意識の中で一つだけ悪い印象を持つ恐れがあるのが、「盗作」である。他人の作品を精巧に写しとり、自分の印を押し、自分の物としての販売や、名のある人のサインをしての販売等は許し難いが、ビジネスとしては大成功だと言える事ができ

るだろう。盗作とまでは言わないが、中国からの焼き物を日本で写して輸出していた事実は存在する。だが、その技術が発展し、新しいアイディアが生まれ、ヨーロッパを風靡する様な磁器が生まれた事実を見ると、悪いことばかりでもないようである。写すという行為はあらゆるところで文化の発展に貢献している。

盗作に引き換え、誰もが経験するのが「学ぶ写し」である。学ぶの語源が真似ぶだと言われている様に、写す事は効率的に学びを得る事ができると考えられている。人は真似の連続で出来ることを増やしている。学ぶ写しは世界共通で、あらゆる巨匠達も真似ることとその基礎を作り、そこに自身の経験を擦りあわせていくことでオリジナリティを作り出していった。

写しを考えるにあたり、衝突するのがオリジナルの問題である。本当の意味でオリジナルは存在し得るのだろうか。写しの上になにオリジナルを私は知らない。オリジナルだと思える作品は何を写したのかが分からないだけで、写しなのではと考えている。ただ、複雑で専門的な物を写した場合は何を写したかは分かりづらく、写しを読み解くには多くの知識が必要だ。私たちの脳が、今まで培ってきた知識でしか物事を考えられない以上、その作品はオリ

ジナルであるというこはあり得ない。過去とのつながりの中で物事は生まれる。なぜならば、人は今まで培った知識で想像するからである。

つまり、ひとつの絵は写しであり、オリジナルなのである。自然を表現した絵は、自然を写したものに違いないが、自然そのものと描かれたものは当然、同一ではない。そして既にある絵を写した場合においても、写した絵は様式、技法や表現に様々な要素が組み合わさって成り立っており、写した絵は同一でない。つまり、絵には独創性があるだけとも言えないだろうか。

「残す写し」は形の復元や、保存のため、先人の意思、心を残す写しである。そして、学ぶための写しと似通った性質を持っている。国宝、重要文化財の復元、保存などがこれにあたる。ここでは精巧に写す事が求められ、本物と同じだけの質を要求される。その他にも、壊れてはいないオリジナルの器のかわりに写しの作品を使用し、そこに本歌を見て取るといったケースも存在する。

江戸時代の陶工達は、偉大な陶芸家（乾山）の写しを巧みにできるといふ事が評価の基準になっていた。本物も大切にしていたが、それ以上に「形」を重視していた。写す伝統である。「モノ」はいつか消え

て無くなってしまうが、「形」は本物の精神が宿る依代であるからだ。つまり、本物の形を真似てもう一度つくり直す事で、心は永遠に受け継がれていくと考えたわけである。仏壇に手を合わせる時に似ている。仏壇を通して、その向こう側を見て取るのだ。

エジプトの絵画は二千年間進化した。ただ求められている正解を描く事が求められ、変化を期待をされていなかったからである。そこで重要視されていたのは写実的に見たままを描き起こす能力ではなく、形式を通して同じ心を伝えたかったのではないだろうか。

精神性を受け継ぐ国に、オリジナリティが重視される思想が海外から入ってくると、写しはただ複製を制作する行為であるとみなされるようになる。特許権などの法律が整備されていく事で写しを作るのに制約が生まれ、偽物作りがしづらに環境に整えられていく。それは精神性の継承に大きな亀裂が入った事にはならないだろうか。今後、こういった倫理思想の変遷のふりに文化は耐え抜く事ができるのだろうか。残ったものが文化であると言われるとそれまでのだが。

最後に「祈る写し」というものを紹介したい。祈る写しとは、写経や

写仏がこれにあたる。祈りという行為を通じてか、行為が先なのかは分らないが、移す事を通じて祈りをする行為である。この場合も写す事が目的ではなく、祈るために写しているのである。テキスト4、5月号に掲載の絵巻『幕帛絵詞』の模写は鈴木空如によるものだが、鈴木空如は法隆寺の金堂壁画を模写したことで知られている。一人娘を五歳で亡くし、金堂壁画の模写にのめり込んだらしい。一人で蠟燭の炎だけで描きつた彼を想像するに、人のためという気持ちもあつただろうが、祈るように描いていたと想像してしまふ。

絵図を模倣して立花を立てると、その行為を通して流祖のことをあれやこれやと考えてしまふ。学ぶために写す行為は、祈りにも似た感情を起こさせ、それはやがて残すための写しとなる。そして、盗作されるほどの物になれば良いなと思える。

継承された形を理解し、現代の空気を持った物を生み出す。芸能としての創造性は、写すことを通して過去の表現を理解し、そこに現代的な解釈を組み入れることによって今の表現となる。そして写しの連続が伝統であり、文化、生命の継承なのである。

仏教遺跡に見る花と瓶

仙溪

インド↓中国↓日本という仏教伝来の流れの中で、花と器について探ってみよう。

インドのアジャンタ石窟寺院には6世紀頃の極彩色壁画が残る。日本に現存する最古の仏教絵画である法隆寺金堂壁画（奈良県斑鳩町・7世紀末）は、アジャンタの壁画を模したものと

の説がある。（様式的には中国敦煌の莫高窟などにみられる初唐絵画の影響を受けている）

そもそもインドにおける祈りの場では、花は器に挿すのではなく、香りの良い花を摘んで糸で綴ったり、器に盛ったり散らしたりして供えられる。良い香りには悪を遠ざける力がある。図②でも菩薩の左後ろで蓮（もしくは睡蓮）の花を盛った盆を持つ人が描かれている。

泥の中から伸びて美しい花を咲かせる蓮や睡蓮は、仏教においては悟りの象徴とされている。図①の菩薩も、悟りを得た者の証として蓮（もしくは睡蓮）の花を手に持っている。

図③の菩薩は2種類の花を持っている。詳しくは不明だが、大きい方は白花の熱帯睡蓮か。小さい方は丸い白色5弁花で、同じく熱帯の水生植物ではないかと思う。様々な花に、悟りの開花を託していたのだろうか。



出典：<https://www.ana.co.jp/travelandlife/feature/original/vol122/>



出典：<http://double-dolphin.blogspot.com/2015/12/photography-inside-ajanta-caves-tips-and-tricks.html>



出典：<http://kuradashieigakan.com/con34ajanta/ajanta3.htm>

インド、アジャンタ石窟寺院は虎狩りに来ていたイギリス人によって1819年に発見された。紀元前1世紀～紀元後2世紀と、5世紀後半～6世紀に開窟された僧堂と祠堂（仏塔をまつる）からなる仏教窟。図①②は第1窟（6世紀頃）の蓮華手菩薩（図①）と金剛手菩薩（図②）。図③は第11窟の蓮華手菩薩。

インドで生まれた仏教は各地に広まって行く。そもそもインドでは釈迦の入滅後、長い間仏像は造られなかったが、紀元後100年前後に、北インドのマトウラーとインド北西の王国ガンダーラで、最初の仏像が造られるようになった。ギリシャ・ローマ美術の影響を受けていた中央アジアの民が、すでに仏教の栄えていたこの地域を治めたことで、仏教の内容が仏像として造形化されることとなったのだ。

図④はガンダーラから出土した2〜3世紀の菩薩像で手に水瓶を持っている。菩薩とは更な



出典：http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/ 仏教美術 ?updated-max=2014-09-26T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=15&by-date=false

る悟りを得るために修行している人をさすのだが、この像は未来で仏になることを約束された弥勒菩薩と考えられている。弥勒には慈悲みという意味があるそうだ。優しいお顔である。

さて、水瓶は修行者の大切な持ち物であり、中の浄水や香水を清らかに保つために、花や木で瓶の口に栓をしたと聞いたことがある。

釈迦の弟子が水瓶と花を持つ姿で彫られた像も、中国の雲崗石窟に残っている（5世紀後半図⑤）。

良い香りのする水と良い香りのする花を持つ

て、釈迦の教えを広め歩く弟子達の姿が目につかぶ。水も花も修業に欠かせないものであり、また釈迦の教えによって人々の苦しみを和らげるための大切な役割があったのではないだろうか。

この水瓶もしくは花を持つ姿は、多くの菩薩像に見られるが、中には手に持った水瓶に花が挿された像も現れる。

インドでは花だけを摘んで供えていたものが、いつしか花瓶に花を挿して供えるようになったのには、気候と植生の違いも関係したと考えら



出典：http://arts.fgs.org.tw/fgs_arts/tw/pic_image_show.php?arg=FxFCWecCwwZ5LqpsJgnd9EratR38Zg

弥勒菩薩坐像 2〜3世紀 ガンダーラ出土 松岡美術館蔵（仏教の来た道シルクロード探検の旅展図録より）

中国山西省大同市の西方にある雲崗石窟は5世紀後半の石窟寺院。第18窟の弟子像は左手に水瓶、右手に花を持つ（図④）。

れる。今もインドの女性はジャスミンの髪飾りを好んで身につけているが、花は摘むもので、花もそれに応える強さを持っている。中国や日本の花とは性質が異なる。

仏教はインドから中央アジアを経て敦煌へと伝わり、中国に広まることになる。敦煌は中国の西の玄関口。東西交易の要衝として栄えた砂漠のオアシスだ。

図⑥は敦煌・莫高窟の壁画である。左手に水瓶を持つ観音菩薩で、煌びやかな天蓋や瓔珞が目を引く。

消えて分らないが、右手には蓮華を持っていると想像したい。やがて悟りを求める心の象徴として、慈愛に満ちた導きの顕れとして、水瓶に蓮華が立てられて、日本の供花となり、いけばなへと繋がって行く。そんなことを空想している。



出典：http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/敦煌?updated-max=2012-12-18T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=30&by-date=false

敦煌莫高窟 第45窟 南壁中央壁画。盛唐・開元年間（713～741年）。水瓶を持つ観音菩薩。右手にも何か持っていたのかは消えていて分からないが、蓮華が持たれていたのではないだろうか。

レモンちゃん
観音菩薩立像？ オベリスク？ ロケット？
いえいえ、レモンちゃんです。



撮影：高田菜月



グラジオオラス

△9頁の花▽ 健一郎

花型 生花 行型

花材 グラジオオラス（菖蒲科）

花器 陶鉢一対（フランス製）

グラジオオラスは江戸時代の終わりにオランダ人が持ち込んできた植物で、「阿蘭陀菖蒲」と呼ばれていた。園芸品種の生産が盛んで、白、ピンク、赤、オレンジ、黄色、紫や、青に近い色の品種でもある。今は年中花屋で売っているが、やはり旬のグラジオオラスはしつかりとしており、勢いがある。

生花としては杜若などと同じく菖蒲科の植物として葉組を行なう。花屋で選ぶときは花は勿論の事、葉に気を配りたい。花屋さんではより綺麗に見せるために、黄色くなった葉先を上手く切つてあるので、よく注意して見ないと自然な葉先なのか切られたものなのか分からない。葉先に気をつけて花を選びたい。

真を少し高く伸びやかにしたので、控も丈を長くし、バランスをとっている。副の蕾が良いアクセントになっている。



器と花の相性

△10頁の花▽ 仙溪

花材 宮城野萩 (豆科)

斑入りの笹 (稲科)

花器 陶偏壺 (吉川充作)

庭のハギを一風変わった器に付けてみると、とても良く合ってくれた。個性の強い器は、かえって野に咲く花と相性がいいのかもしれない。外見は怖そうでも、繊細な心の持ち主。そんなほのぼのとした良さが滲み出る。



野萱草

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 野萱草 (百合科)

花器 陶花器

立派なノカンゾウが手に入った。写真のような状態で、葉と花が株のまま切られて葉で括ってあった。解



くとそのままで格好がいいので、まず紫陽花と合わせて伸びやかに投入にいった。(12頁の花)

数日飾ったあとで、今度はノカンゾウ一種で生花に付けてみた。初めてつけたが、葉のねじれ具合がいい味を出してくれる。数輪あつた蕾も順に最後まで咲いてくれた。葉先から黄色くなってくるが、程良くアクセントになっている。

カンゾウには一重咲きのノカンゾウと、八重咲きのヤブカンゾウがある。人家によく植えられて、若芽と花の蕾は食用になる。食べると憂いを忘れさせてくれるというので、ワスレグサとも呼ばれる。

いつか、稽古で普通にいけられるようになれば嬉しい。



カンゾウの葉で括られていた。





玄関にいける

△12頁の花▽ 仙溪

背景 富春軒の玄関

花材 野薔草（百合科）

紫陽花（紫陽花科）

花器 陶花器

オンライン展覧会にこの写真で参加させていただいた。展覧会場に来て頂けない分、会場ではできない見せ方ができるなら、オンライン展覧会をする意味もあると思う。

是非、左記のサイトをご覧ください。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
7 月号
No. 697

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





檜扇 ひおうぎ

仙溪

扇のような姿に葉をつけるヒオウギは、古より悪い物を追い払う力があると信じられていた。私の想像だが、身につける厄除けの道具としてヒオウギに似せて作ったのが檜扇なのではないだろうか。お雛様が持たれているヒノキの薄板を綴り合わせたあの扇だ。それまではヒオウギの古名「カラスオウギ」と呼ばれていたのが、それ以後ヒオウギと呼ばれるようになった。(のではないだろうか)

もしそうだとすると、檜扇を元に考案された紙扇や扇子も、植物のヒオウギゆかりのものとなる。人と自然の関わりを感じている。

今年もヒオウギの季節がやってきた。力強く晴れやかな姿に生きたい。

出逢い花 (41)

△2頁の花▽ 仙溪

檜扇 ひおうぎ
(菖蒲科)

木槿 むくげ
(葵科)

花器 染付花瓶

鉢植のヒオウギに庭のムクゲを添



えた。染付の花瓶に爽やかに映える。



ヒオウギの生花

〈3頁の花〉 仙溪

花型 生花 行型

花材 檜扇ひおうぎ（菖蒲科）あやめ

花器 陶水盤

ヒオウギの姿を生かすこと。
加える葉はできるだけ少なく自然に。



カジノキの葉

△ 4 頁の花▽ 櫻子

花材 梶の木（桑科）
はたのき（くわ）

蛸袋（桔梗科）
はたのき（きんぎょう）

花器 角形染付花瓶

古代からカジノキは神に捧げる神木として尊ばれて、神社の境内などに多く植えられていた。カジノキの繊維から紙や布を作っていたことから、もとは裁縫の上達を願う行事でもあった七夕に縁が深い。「天の川へ渡る船の梶（かじ）となつて願いが叶えられる」と信じられていた。今日では短冊に願いを書いて笹に結ぶ風習となる。

庭でカジノキを小さな苗木から育てている。夏になり葉が大きくなると複雑な形に変わっていくのが楽しい。伸びた枝を少しだけもらってホタルブクロと飾った。

庭の祇園守り（木槿）とカジの
 浮かし花





思い出の器

△5頁の花▽ 健一郎

花材 接骨木にわとこ すいかずら（忍冬科）

花器 陶扁壺（ティム作）

私たちの結婚の知らせを聞いたマンチェスターの純子さんが企画して下さい、お祝いの品が海を渡って届いた。それは初めて見た器ではなかった。ティムさんの庭の西洋ニワトコ、スキ、百合でお花を生けたあの器であった。



日本のニワトコをのびのびと生けた。彼の日本的趣向もあいまって良い器だ。





自然の動き

△6頁の花▽ 仙溪

花材 斑入り黄梅（木犀科）

クレマチス「エレガフ

ミナ」（金鳳花科）

斑入り甘野老（百合科）

花器 鉄枠付赤ガラス花瓶

春に黄色い花を咲かせるオウバイは半蔓性の落葉低木で、ソケイの仲間なので、葉の感じがソケイによく似ている。

明るい斑入りのオウバイを枝姿が生かせるように背の高い花器にいけ、クレマチス・エレガフミナを絡ませた。

どちらも自由な動きがあるので、花が行きたそうな方向に挿してゆく。

偶然生まれる新鮮な美しさ。斑入りのアマドコロで明るさを加えた。





煙けむりの木

△7頁の花▽ 櫻子

花材 煙けむりの木（スモークツリー）
（漆科）

カラー5種（里芋科）

花器 ガラス鉢

涼しくて陽当たりの良いレストランの中庭に不思議な木があった。近づくにつわつわした雲の中に入り込むような感じ。いい香りがして柔らかに包まれるようだった。

初めてスモークツリーを見たのはドイツだった。ずいぶん昔の事なのでレストランの名前も思いだせないけれど、一緒にいたドイツの友人がドイツ語名で教えてくれた。難しく聞き取れなかったけれど、意味はカツラの木。ウィッグの事らしいが、日本は煙だし、国によつてずいぶん見方が違うのだ。

スモークしてとてもきれいな花となる。カラフルなカラーを集めて夢のような思い出の花に。



『かわいい』

健一郎

家にレモンの友達を迎えることになった。名前はメイと言う。猫アレルギーの菜月といつも一緒にいる。活動的でよく食べる。菜月は言う。かわいいと。千度かわいいと言うので、かわいいを日頃に比べ意識した1ヶ月になった。

威圧的な要素がなく、笑顔や丸み、色といった要素を手がかりとしながら、自分との関係性を意識的、無意識的に評価することによって、「かわいい」感情は生まれるそうだし、感情は生まれるそうだし、なるほどと納得をせざるを得ない。それは幼い個体に当てはまりやすいが年齢関係なく条件を満たすと「かわいい」と言う感情は生まれるのだから。

グループホームで働いてい

るとその言葉はよく聞く。利用者さんが利用者さんに言う場合もあるが主に職員が利用者さんに対して使う場合が多い。僕がひねくれているのか、このかわいいは、聞こえるた

私の氣に触る可愛いについて少し考えてみることにした。原因は職員が利用者さんを守るべき存在として考えることにより得る安心感が影響してできた「かわいい」であつた。そして他と比較した上での「かわいい」と言う評価だと言うことにも気がついた。幼児扱いする職員も嫌いだし、幼児を幼児として接する人も好きでない。利用者さんでも幼児でもなく〇〇さんである。一様に接することは正しいのかいつも思う。雑なカテゴライズは個を疎かに

する。少なくとも〇〇さんとは向き合えていない。

グループホームで利用者さんと関わり一年が経つた頃から、ふれあいの中で単発的にドキドキすることがあつた。それを今はその人の尊さや、存在の輝きに対する私の心の反応だと感じているが、その時は言葉にしようがなかった。今も言葉にできるほど解りてきている気持ちではない。そのドキドキに可愛いと思う気持ちも含まれたのかも。そしてその可愛さはその人が生き生きとすることで発露する。自分の少しの補助が、その人を取り戻す。あるいは新しいその人になる瞬間が好きで日々関わっている。自尊心の回復が生き生きすること、大きな繋がりを持つている。そしてありのままの自分を認めることができ人は強い。

「みんながこつち見てつて言っている目がかわいい。」

と僕が勝手に仰いでいる介護の師匠は言っていた。感度が高い師匠はいつもドキドキして忙しそうだし。私はまだ、そこまで感じることはできない。その人が生き生きとした瞬間にしかその気を感じることができない。自己を閉ざした利用者さんは、その人にとって、こちらが安心できる存在になると、「私はここに

聞こえてくる。そしてこれらの話は利用者さんが特別なものでなく、誰に対してもそういった感情を持つことは言うまでもない。

「私な、アホで勉強が出来ひんかったからな、先生の動きとか見て真似したり絵描いたりしててん。今も人にはすごい興味があつて、カフェとかに座って1時間でも2時間でも街見てもやけてんねん」と話を師匠から聞いたとき、感度の高さに愕然とした。生粋の観察者である。師匠ほど介護の仕事が似合う人はいない

いだろう。私はその観察眼が欲しい。

かわいいという比較可能な次元を超えて絶対的な存在になるということ。それは各個人の問題かと思っていたが、見る人の感度次第なのだと今は考えている。ドキドキしている時間が一秒でも増えるように観察のスキルを磨くしかない。あるのだから見えるはずだ。



レモンとメイ

①



くれない

健一郎

花材 土佐水木とさみづき（満作科）
あじさいあじさい（くれない）

紫陽花「紅」（紫陽花科）

花器 陶鉢（フランス）

（いけばなプレゼンテーション
出品作 写真①）

トサミズキにアジサイ。季節の勢いある花を勢いのままに生けた。白からだんだん色づいていく紅くれないというヤマアジサイだが上品な紅色が好みだ。花展の花はやはり気持ちが良い。

②



いけばなプレゼンテーション
会場風景（京都芸術センター）



レモンちゃん

「なんの葉かにゃ？」

夏に実を生ける

△表紙の花▽ 健一郎

花材 オクロレウカ（菖蒲科）
実と葉

透かし百合（百合科）

花器 方形陶コンボート

オクロレウカの実と赤黒のスカシユリの2種で生けた。夏らしい花になった。生けてみるとオクロレウカの実の重さに気づく。古い葉から黄色くなり、若い葉はまだ緑を保っている。黄色くなった葉は少し倒れ、実が浮き出してくる。背景の色、器ともに強い色を選んだが個人的には納得いく作品に仕上がった。



プルナ・カラサの今と昔

仙溪

花と器の図像を探るうちに古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いたが、それは「豊かさ」と溢れる生命力」を象徴していた。

そのイメージは、私達が器に花をかけた時に「命の輝き」「生命の神秘」のようなものを感じることと、深いところで繋がっているように思う。

手にした花を生かそうと無心になっ

て生けることは、インド哲学的に言えば「小宇宙（個人）」と大宇宙（宇宙）の関係を体感し、それを形にしているとも言え換えられる。

インドでは今もプルナ・カラサは大切なアイテムだ。古典的なインド芸術の8つの縁起の良いシンボルの1つであり、人生の充足と繁栄を象徴している。ヒンドゥー教の家庭では伝統的に儀式や結婚、出産に関連する祭典において崇拜の対象となっている。

ただし、壺から生え出るハスではなく、水を入れた壺にマンゴーの葉を入れ、その上にココナッツが置かれ、花の供物がトッピングされる（図①②）。壺は地球、子宮、個人、信者の心にとえられ、水は生命を生み出す創造的な力と見なされ、マンゴーの葉は愛の神カーマを表す豊かさの象徴であり、

ときには五感を表す。換金作物のココナッツは繁栄と豊かさ、深い意味では神の頭または意識を象徴する。その固い殻は人に寛容さを与え、成功を達成するために一生懸命働くように促す。ココナッツはまた、寺院の神の前で砕かれ、魂がエゴの殻から抜け出すことを意味しているようだ。

プルナカラサは、ヒンドゥー教の神話の5つの原始的な要素とも関連付けられる。壺の広い下部は「地」、広がった中央部は「水」、上部または首は「火」、口は「風」を表し、ココナッツとマンゴーの葉は「虚空」を表している。

プルナ・カラサによって人は世界と繋がり、条件付きの存在から解放される。

（参考）：「The Conceptual, Cultural and Artistic Significance of Purna-Kalasa and its Use in Hindu

and Muslim Architecture of the Subcontinent」
Naela Amir (University of the Punjab, Lahore, Pakistan.)

古代インドの研究者、アグラワラ博士の「プルナ・カラサ」に関する書物（図③）には次のように書かれていた。

「プルナ・カラサは最も初期の時代から神秘的な生命力の目に見える象徴として、また美と縁起の良い装飾的なモチーフとして人気があり、インド文明の時代を通して存在してきた。」

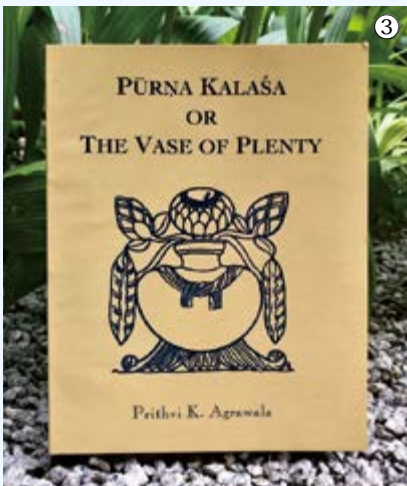
「崇拝や儀式において神またはゲストにプルナ・カラサを提供するというインドの普遍的な慣習がある。」

古い時代の叙事詩に、王妃が通る道を金や銀の壺にハスを挿して飾ったという記述もあるようだ。

そしてこの本の巻末には補足として、プルナ・カラサの起源を考える上で、



現在のプルナ・カラサ。ヒンドゥーの祭典で重要な意味を持つ。出展 図①：<https://www.wordzz.com/kalash/>。図②：<https://www.nithyananda.org/photo-gallery/nithyananda-diary-7th-august-2013-photos#gsc.tab=0>



「Purna Kalasa or The Vase of Plenty」
Prithvi K. Agrawala 著。



肩から川を出す神「エンキ」が山に足をかけている。円筒印章の印影。前2300年。大英博物館。

出展：図④⑤⑥ https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1891-0509-2553

※このページの図は古い時代から順番に掲載しています。

印影



⑥

円筒印章 ⑤



メソポタミアの「水が溢れ出る壺」が紹介されていた(図⑩)。「ゲデアのピーカー」と書かれている。
ゲデアは紀元前22世紀頃、アッカド王国滅亡後のメソポタミア南部ラガシュの支配者で、神に祈るゲデア自身の石像が多く見つかっている。その中に水が溢れ出る壺を持ったものもあるのだが(図⑪⑫)、そもそもこの水の表現は

円筒印章(シリンダー・シール)は円筒形の石の表面に図像を彫り、粘土板に回転させて押印する。「Adda」の印章。左から狩猟神、イシュタル、太陽神、エンキ、ウシム。高さ3.9cm。前2300年。シッパル(?)。大英博物館。



⑦

エンキが王座に座り、肩から流れ出る川に魚が見える。高さ3.9cm。前2250年。大英博物館。

出展：https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1911-0408-7

シュメール神話に登場する水の神「エンキ」の図像に見られる。
紀元前23世紀の円筒印章(円筒形のハンコ)に、肩から川が湧き出るエンキの姿が彫られている(図④⑤⑥⑦)。「エンキ」には「地の王」という意味があるそうで、あらゆる生命の源と解釈すると、インドにおけるプルナ・カラサとの繋がりも感じられる。
太古からの清冽な水の流れ。人は水に豊かな生命力の源を感じとり、壺と花の造形を生んだ。過去に自然と人の関係から様々な美が創造されてきた。いけばなもその一つなのだと思う。



⑨

「アッカド王シャル・カリ・シャリ」の印影。2人の英雄が水が湧き出る壺を持つ。スイギュウのいるインダスと、メソポタミアが交流していたことが読みとれる。高さ3.9cm。前2217～2193年。ルーヴル美術館。出展：<https://collections.louvre.fr/ark:/53355/d010147030>



⑧

ひざまずく4人の英雄。うち1人の頭に水が湧き出る壺が見られる。前2220～2159年。アッカド、メソポタミア。高さ2.8cm。メトロポリタン美術館。出展：<https://smarthistory.org/cylinder-seals/>



⑫



⑪



⑩

⑪ ラガシュの王子ゲデア。農業の女神ゲシュティンアンナに捧げるための、水が湧き出る壺を持つ。前2120年頃。ルーヴル美術館。⑫ 水の流れに魚が見える。出展：図⑪⑫ <https://collections.louvre.fr/en/recherche?q=Gudea>

無限の水が流れ出る壺を示す石灰岩の記念碑の一部。ゲデアの時代。大英博物館。出展：<https://www.britishmuseum.org/collection/search?agent=Gudea>
この図像はゲデア以前、アッカド王国時代から見られる(図⑧⑨)



ボッグウッド 仙溪

花材 芭蕉の枯葉（芭蕉科）

エンシクリア・アデノ

カウラ（蘭科）

アロエ「不夜城」（アロ

エ科・ユリ科）

ボッグウッド

花器 陶花器（篠原雅士作）

アイルランドの泥炭層に埋もれていたオークの木片「ボッグウッド（埋もれ木）」。長い年月をかけて自然がつくった色艶には深い魅力がある。

華道創心流家元の作られる黒釉掛け流しの花器がこの木片に合うと思った。器にのせると木片が生きて生きた。芭蕉の枯葉も違和感がない。あとは個性的な蘭の花があれば充分だ。蘭に葉が無かったので小さなアロエを覗かせた。

（いけばなプレゼンテーション
出品作）



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
7 月号
No. 709

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





檜扇 ひおうぎ

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 せいけ 株分け
花材 檜扇 あやめ (菖蒲科)
花器 陶水盤

古来その姿と漆黒の実によって烏扇と呼ばれ、扇ぐ風で疫病を退散させた。檜扇と呼ぶ今も祇園祭には疫病退散の願いをこめていけられている。今年は3年ぶりに山鉾巡行が行われる。



ヒオウギの実
(ヌバタマ)

<https://beyond-ecophobia.com/belamcanda-chinensis/amp/>



上から見た奥行



トルコ桔梗 ききよう なでしこ 撫子

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 トルコ桔梗(竜胆科)

美女撫子(撫子科)

花器 陶水盤

手毬のような花はビジョナデシコで、ヨーロッパロシア西部に自生する多年草。ヒゲナデシコとも、何故かアメリカカナデシコとも呼ばれる。トルコキキョウはアメリカ原産。これらを株分けでいけて床の間に飾り、ブルーが鮮やかなトルコの細密画を掛けた。

この花たちのように世界の国どうしがより良い関係を築けますように。





おとぎ話のような

△4頁の花▽ 桜子

花材 デルフィンニウム

(金鳳花科)

茴香 (芹科)

カンパニュラ (桔梗科)

花器 陶花瓶 (フランス製)

この立派なデルフィンニウムの故郷はヨーロッパから中央アジアにかけての山岳地帯だそう。冷涼な高地の草原湿地に咲く姿はさぞ幻想的だろう。

地中海沿岸原産のウイキョウとカンパニュラを合わせ、金の三日月模様の器にいけた。不思議な花たちが咲くおとぎ話のようないけはなになった。





ニューサイラン

△5頁の花▽ 仙溪

花材 ニューサイラン2種

(竜舌蘭科)

鉄砲百合(百合科)

トルコ桔梗(竜胆科)

花器 陶水盤(伊藤典哲作)

びわ湖大津館イングリッシュガーデンでニューサイランの花を見つけた。真っ直ぐに伸びて、天に昇らんとする龍のようだ。いける時も葉の勢いを生かしたい。



㊦チョコレート色の蕾。
㊧ニューサイランの株。



笹百合

△6頁の花▽ 健一郎

花材 笹百合(百合科)
土佐水木(満作科)

花器 白釉陶花器(崔龍熙作)

夏にならないと百合は生けない。年中花屋に置かれているが、生活の景色とあまりにもかけ離れすぎていて季節以外の百合に対して強い違和感を持っている。

栽培されている花の場合、花屋に並ぶ時期が早いことがあるが、できるだけその時の花をその時に生けるようにしている。いつも今の季節を楽しんでいる。この笹百合と取り合わせたのは生けた季節に飛び切り綺麗だった土佐水木。気に入っている器に生けた。



初夏の砂物

△7頁の花▽ 健一郎



花型 砂の物
花材 花菖蒲 (あやめ
の かんぞう
野萱草 (百合科)
太蘭 (蚊帳吊草科)
蜜袋 (桔梗科)
土佐水木 (満作科)
河骨 (睡蓮科)
擬宝珠 (百合科) 晒木

花器 陶砂鉢

この花を撮影した次の日に妻と蜜を見に行った。

この立花を見るとさまざまな事を思い出す。子供のいけばなや学生達と生けたフトイ、妻と見に行った花菖蒲、蜜の側で咲いていた蜜袋、滋賀の平地付近で見た野萱草、河骨は今年初めて自分の稽古で生けることになった。花屋さん、産地の農家さんの協力があったのである。全て今年の体験である。

少しずつその花のイメージが強くなっていく。面白い砂物が出来上がった。



『お花の倫理』

（復興いけばな宣言）』

健一郎

倫理とは「人として守り行うべき道」とある。

人は変わり続ける。すると倫理も変わり続けるだろう。26年ほどみてきたが、その時間だけでも倫理の移り変わりを眺めていて興味深く感じている。

近頃イルカショーの廃止のニュースが流れていた。楽しみにしていたのに残念だとの事。古代エジプト、中世のヨーロッパの頃から王侯貴族が、戦利品として収集し動物を持ち帰って見せたのがサーカスの始まりとされている。獅子は王と共に描かれていたのを目にする。程なくしてサーカスが誕生し楽しまれてきた。家畜化にも成功し、人は増えた。家畜の在り方など人と動物の関係が見直されるようになり久しい。人が広い視野を獲得していくたびに倫理は上書きされていく。今動物と人間の関係がもう一度見直しされようとしている。

学生時代、北海道の登別の熊

牧場で熊に向かつて魚を投げる事ができなかった。周りの観光客は、可愛いといい、熊の群れに向かつて上から魚を口へめがけて投げて喜んでいいる。口から外れた魚には見向きもしない。私は餌の購入を拒否したが、同伴していた友人が一つ魚を分けてくれた。人が動物へ魚を与えろという図式をまざまざと見せつけられた様な気分だ。数メートル離れた熊に魚を遠くへ投げ、歩くよう促すが、口に上手に投げられた魚しか口にしない。もちろん、熊牧場は餌やり体験で観光客を惹きつけているのだが、熊の研究、保護、観察、熊と人の共生するための方法を知るために始まり、今でもそれは変わらない。餌やり体験で人が惹きつけられることが個人的に情けなく思っている。

こどものいけばなでフトイ、バラ、ナルコユリでお稽古をした。好奇心の強い彼はフトイを曲げて剣山に刺していた。母親は私の顔を見て申し訳なさそうな表情をしているが彼を見守っている。母親曰く、他流派のお花でその様なお花があり、やってみたのだそう。私は彼に聞いてみた。「薔薇は曲げなかつ

たのですか？」可哀想だから曲げないとのこと。フトイは可哀想ではないのかと尋ねると可哀想だと言う。好奇心でお花に対して失礼なことをしてしまったのだと落ち込んでいた。無意識でなく、意識的に人が変わることで自分を変えることについて話した。先生の前の自分と母親の前の自分。ちよっかいを出している相手と出していない相手の違い。彼はいじめの問題も無意識な決めつけが原因であるとの結論に至った。それが合っているかはともかく、考えることが大切だと感じている。

推察するに、彼は自分と向き合っていたのだろう。そして僕は花と向き合うことを伝えたいと、再認識した。だがそれはその花の向こう側の自分と向き合っているのかもしれないとも考えている。

芸術の世界ではオリジナリティが大切だとされる。自分を出そうとする事は自然な事だが、私は、無理して作ったオリジナルだと主張する作品の浅薄さがいけばなに限らず苦手だ。いけばなの場合においても、無理せず、そのままだがよい。同じ

思いを持った人がいたとしても個人の差は表出する。花が一本一本違うからだ。同じ作品に見えたとしてもそれは見る人の力量不足だ。各個人が感じた花の魅力を引き出すのは人である。

動植物をかわいという愛でている人はよく見かけるが、可愛がることとその生き物がいい状態であるかは全く別の話である。私はいい状態である事を前提としている。可愛らしいフトイを折り曲げることはフトイにとっていい状態ではないし、過度に撫でられすぎた犬はストレスを抱えている。

生ける花として花がある場合に、葉の一枚、枝の線までに魅力を感じ、その姿を生かきするいけばなを伝えたい。

切花になった時点で花は死んでいるので何をしてもいいと考え、シンプルな葉、茎を面白くしようと人らしさを花で引き出そうとするのは好みでない。過度に人の目を気にしてお花を生けてほしくない。過度な傾倒は大切なものを見えなくさせる。花の気持ちを考えて、その人の個性を大いに尊重してそ

の人が大いに楽しむいけばな。植物をおり曲げたり、花を触る人が自由にすればするほど、植物は苦しそうだ。生き物の命を使って自己表現しなければならぬほど人は特別なのかと疑問を持っている。

生活に必要なため行われる利用や、飾る花としての利用に関しては、脈々と人の中で続いてほしい別の文化である。

曾祖父の13世家元は新興生け花宣言を呈したうちの一人であるが、著書『いけばなの四季』で創作的な造形をいけばなとは明確に区別している。伝統的ないけばなや、現代的な盛花瓶花と創作的造形を混同することがいけばなよくないことであると著されている。

13世家元に会ったことはないのだが、本を通して、熱量のある主張や、写真に残っている花や造形作品を通して魅力を感じている。13世家元のお弟子さんに話を伺うと人となりが少しずつつ浮かび上がってくる。古い本ではあるが、読みこたえ十分で、今の時代に読んでも面白いことに驚く。

（つづく）

荷葉一色

花伝書を見る

立花 荷葉（蓮）一色

桑原次郎兵衛

蓮

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

28本の花・実・葉・巻葉が渾然一体となっている。この立花を立てた桑原次郎兵衛は初版において富春軒36作に次ぐ16作の絵図がある。富春軒が自然の面白みに寄り添う感じな

のに対して、次郎兵衛は自然の造形の組みあわせを楽しんでいる感じがする。自然体の富春軒と攻めの次郎兵衛。二人はどんな関係なのだろう。



桑原次郎兵衛

流展の立花時勢粧解説
パネルで作者と作品数
に間違いがありました
ので訂正します。

正…富春軒仙溪 18 (36)



河骨の生花

△表紙の花▽ 健一郎

花型 生花 行型

花材 河骨 (睡蓮科)

花器 ガラス花器 (コスタボ
ダ)

可愛らしい。葉の質感がそう
思わさせるのだろうか、生えて
いる様だろうか。小さな花から
だろうか。切り花になった際の
儚さだろうか。個人的には水生
植物の中で一番自分に近い波長
を感じるからだろうか。水を見
せるべく小さなガラスの器に一
種で生けた。

薔薇の生花 (写真⑤)

健一郎

薔薇の枝振りが好きなの
で、枝振りを見せやすいお生
花の様式を借りて生けた。暴
れた薔薇を手当たり次第に
貫つたのはいいが、生けるの
に一苦労する。生かすのが難

しいが、そのものの良さを引
き出せたと思う。器は薔薇の
歴史を感じさせるような小川
欣二さんのものを。奥田薔薇
園さんの薔薇は香りが良く、
幾度嗅いだかわからない。香
る赤い薔薇は珍しいとのこと。
1ヶ月後の今も蕾が咲き
部屋で楽しんでいる。

「花の芸術2022」作品集

立花時勢粧解説付き

A4版 128頁

3300円 (税込)

立花時勢粧333年、「花の芸術」
桑原専慶流いけばな展の作品集を
つくりました。

ご希望の方は家元事務局へ。



(075 221 2950)



水辺の二友

△12頁の花▽ 健一郎

花材 花菖蒲（菖蒲科）
河骨（睡蓮科）

花器 手付八角銅花器

花菖蒲と河骨。お生花で取り
合わせても良いが、一輪ずつ勢
いのあるものを出逢わせた。小
品の花ではあるが、手つきの銅
の器が品よく合っている。



メイちゃんは木登りが大好き。
でも下りられず助けを呼びます。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2023 年

7 月号

No. 721

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





梶の木

△2頁の花▽ 仙溪

梶かじの木（桑科）

透し百合（百合科）

トルソー形陶花器

カジノキはクワ科・コウゾ属の落葉高木。古代から神木として尊ばれ、神事の供え物の敷物に使われた。樹皮はコウゾと同様に製紙原料となる。

中国の「乞巧奠きつこうでん」という行事が奈良時代に日本に伝わった。牽牛・織女けんぎゅう・おりひめの二星が天の川を渡って逢う陰暦7月7日に、手芸・裁縫などの技巧上達を祈る。この時、カジノキの葉に願いを書いて、七夕飾りの短冊として使われた。

今年も七夕には庭のカジノキをいけようと思う。去年と今年とで葉の形が変わったようだ。三叉槍さんさやのような形が邪気を払い除けてくれそうだ。





なんか合うな

△3頁の花▽ 健一郎

日向葵^{ひまわり}4種（菊科）

ニューサイラン2種

（ツルボラン科）

人面陶鉢（南米）

この花のとり合わせにはこのインカの器が合うなと思った。あとで調べてみるとインカ帝国とヒマワリは切っても切り離せない関係で、種を食べたり、染めや医療でも活躍し、神殿の巫女たちはヒマワリをかたどった黄金の装飾品を身につけていたらしい。そんな深い関係があるとは知らずにこの器を選んでいたので不思議だった。知識をつけすぎるとこういったことが無くなりそうな気がするが、そうならないように感覚を研ぎ澄まさせていたい。なんか合うなを大切にしてお花をいけるのは楽しく新鮮だ。





バランスをとりながら

△ 4 頁の花 ∨ 仙溪

柏葉紫陽花（紫陽花科）

桔梗（桔梗科）

スプレー菊（菊科）

結晶釉花器（前田保則作）

花屋さんの庭で育ったカシワバアジサイ。花の重さのわりには茎が細い。背の高い器に投入にしようか迷ったが、深鉢に盛るようにいけてみた。

器の底に剣山を置き、柱を4本立てて×形の仕掛けをし、その中心にもたれさせるのだが、花の重みと撓る茎との微妙なバランスを試しながらなんとかいけられた。器は鉢形だが、投入のようないけ方をしている。

個性的な花材をその枝の向くままにいけていく。そんないけ方が私には合っているようだ。もちろんこちらの思いも加わるが、花の気持ちを手に感じとりながら花と折り合いをつけている。





太蘭と紫陽花の株分け

△ 5 頁の花 ∇ 健一郎

太蘭 (蚊帳吊草科)
ふとくい かやつりぐさ

紫陽花 (紫陽花科)
あじさい

陶水盤

何本だったか忘れたが確か
15本の太蘭だったと思う。
3、5、7…数が増えていく。
その花の良さが引き出される本
数で手を止める。檜扇は5本、
立派な物だと3本生けると後は
触らない。数にこだわりの、多く
生けることにこだわると、その
お花の良さが見えなくなってい
まう。

終介を寝かしつけた後、静か
に薄明かりの元、ゆっくりと2
日程かけて生けた。良い趣味の
時間である。それから数日後、
撮影の日に合わせて紫陽花を子
株に加えた。

右後ろへ下がる内添の太蘭が
気に入っている。多少は撓めた
がほとんど自然の弧である。水
辺の情景。良い季節である。





裏白櫻珞の生花

△ 6 頁の花 ∇ 仙溪

裏白櫻珞（躑躅科）

陶花瓶

釣鐘状の小さな花がぶら下がって咲くツツジの仲間だが、薄紅色の比較的大きな花を仏堂や仏像の装飾具である櫻珞に見立てた名前を持つ。葉裏が緑白色なのでウラジロウラク。

はじめて生花にいたが、元の枝姿を生かすことでなんとか形になってくれた。

6月初旬にいけたので葉が柔らかく、枝先の傷んだ葉をかなり剪定している。7月には葉もすっかりしたものがいけられるだろう。



メイちゃん。何か見つけた！





あららぎの立花

△7頁の花▽ 健一郎

あららぎ (いちい科)

檜 (ひのき科) 躑躅 (つづじ科)

陶花瓶 (加藤敏雄作)

一枝の勢いを生かした立花である。新たな立花の可能性を期待した実験的な立花。花がなく、葉の色と枝ぶりに目がいく。写真で伝わらないが、実際に私が受けた印象だと、あららぎ、檜の持つ居心地のいい空感が身に染みる。あららぎは単独で出会うことが多く、またまなか、川の側で頻繁に見かける。立花は水をたつぷりと見せるのが良いが、今回は口の細い器に生けた。花器の色は水や空を連想させる。枝の持つ空気感をどう見せるか、試行錯誤の途中だが、いつか自分の感じているこの気持ちを形にできたらと考えている。



右横から見た奥行

同

花伝書を見る

荷葉(蓮)一色 (行・初版)

富春軒

蓮 芦 小菊

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



蓮池の畔に芦や小菊が生えて
いる、そんな情景が目に浮
かぶ。破れた蓮の葉が、芦の
勢いを際立たせている。それ
ぞれどの方向へ出ているのか。
立体を想像していると時を忘
れる。流祖の時代へのタイム
トラベル。

富春軒

日本にきた満瓶 プルナ・カラサ②

仙溪

奈良国立博物館所蔵の「胎藏図像」
(①②)を見る機会があった。その巻頭にひととき大きく描かれたハスの生え出る宝瓶の絵は、インドのプルナ・カラサ(満瓶)を連想させる。

「胎藏図像」の原本はインド僧・善無畏によって玄宗皇帝の頃に唐で書かれている。唐の都・長安の華やきを彷彿とさせるような華麗さを感じるが、おそらくこの壺の絵に密教の真理を描ききつてあるのではないだろうか。

私の解釈では、壺をのせる逆さの蓮弁は大地、それを支える渦巻く水、丸い装飾は火、はためく紐には風、球形

の壺は水であり虚空(宇宙)であり、そこからハスが生まれ出ている。

球体はガラスのようで、底にはハスの開花が映り、ハスの花から壺が生じていることを思わせる。上半分には撚り紐が巻き付くが、龍の鱗のようななと思つて見ていると、中央上部の小さな丸が龍の目に見えてきた。

8世紀初頭、どんな思いをこの絵に込めたのだろう。仏教に詳しくない私には真の意味は分からないが、じつと見ていると、私たちが生きる生命世界の静寂と躍動、内なる神秘と漲る力が感じられる。

奈良博ではもう一つプルナ・カラサを思わせる壺を見つけた。高さ約60セ

ンチの「愛染明王坐像」(③④)は宝瓶から生まれ出た蓮華の上に座る姿。一つだと思ふ。現在日本で視覚できるプルナカラサの



「胎藏図像」(1194)には密教の世界観が絵で表されている。円珍(814-891)が唐より持ち帰ったものの転写本で、その元絵はインド僧・善無畏(シュバカラシンハ637-735)が『大日経』を漢訳する際に描いたとされる。善無畏は中部インド摩伽陀国の国王で、出家後ナーランダール僧院で学んだ密教を唐へ伝えた。

出典①～④:奈良国立博物館「奈良博三昧至高の仏教美術コレクション展」



「愛染明王坐像」奈良・興福寺伝来。木造彩色截金。高さ約60センチ。鎌倉時代。明王が坐す蓮華を生み出すこの壺(宝瓶)も、生命の母胎としてのプルナ・カラサ(満瓶)のイメージと重なって見える。

花火のような

△表紙の花▽ 櫻子

蚊帳吊草（蚊帳吊草科）

紫陽花（紫陽花科）

額紫陽花（額紫陽花科）

「墨田の花火」他

手付ガラス花瓶

倉敷の岡部先生から、時々家で育てたお花をいただくのが楽しみの一つになっている。

萎れない様に丁寧にお水を当てる。袋に入れて持ち帰らせてくださる。6月は色んな紫陽花や山野草を頂戴した。

オタクサアジサイ、スミダノハナ



ビ、ダンスパーティー、ウズアジサイ、ガクアジサイ、ヤマアジサイと名前が添えてある。全部アジサイ。一番きれいな花を切ってくださいに違いがないと思う。

早速撮影させていただいた。

夏の夜空に打ち上げられる花火のようなカヤツリグサと名前に花火がつくアジサイ。



6月6日はいけばなの日

京都いけばなプレゼンテーション

6月3日～4日 京都芸術センター



庭のムクゲが花盛りです。
左の底紅は「宗旦」。右は「祇園守り」の薄紅種。シベの姿が祇園守紋に似る。祇園祭には「白花祇園守」が神前に供えられる。



柊介は寝返りを覚えました。
離乳食にも慣れてきました！

6月6日はいけばなの日
京都いけばなプレゼンテーション

山法師の生花

健一郎

山法師（水木科）
やまぼうし

陶花器（近藤豊作）

この生花は山で切らせても

らった枝でいけた。高く生える、数種類の山法師の中から一番惹かれた枝に鳥の巣を「みいつけた」。鳥はすでに退居されている。近くで見ると良いものである。ほかにもカタツムリが乗っていたので紫陽花の葉の上へ。豊かな自然の中の贅沢で思い入れのある特別な生花だ。



テッセンの実

△12頁の花▽ 桜子

ベル鉄線（金鳳花科）

鉄線の実（"）

京鹿の子（薔薇科）

陶花瓶

不思議な糸の玉のようなものはテッセンの実で、花のあとにできる多くの花柱が伸びた姿だ。このあとしばらくすると花柱の一本一本が綿毛で覆われて毛玉のようになる。それぞれの付け根には果実（瘦果）があり、いづれ乾燥すると風に乗って飛んで行く。

テッセンの花がこんな実に変化することに最初驚いたが、どんな花でも、可愛い新芽の姿や不思議な実の形を知ること、その花とのつながりが強くなる気がする。できるだけ外へ出て、植物のいろんな姿に触れたいと思う。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
7 月号
No. 733

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七夕にいける 仙溪

梶の木(桑科)

河原撫子2色(撫子科)

紫蘭の斑入葉(蘭科)

陶角花瓶(宮下善爾作)

江戸時代初頭、七夕の日には芋の葉の露で墨をすり、梶の葉に歌をしたためて、織姫・彦星の二星に献じたそう。江戸時代中期には寺子屋に通う子どもたちが書の上達を願い、梶の葉と短冊に文字を書いて笹に結んで供えたが、やがて紙の短冊ばかりとなってゆく。

梶はもともと神に捧げる神木で、供え物は梶の葉の上にのせられた。樹皮の繊維は強靱で和紙の原料となり、織姫が織っていたのも梶の繊維だとか。

昨年の七夕の日、庭のカジノキにナデシコとシランの斑入り葉を合わせてつけた。梶の葉は萎れやすいが、七夕の昼に付けて星に願い事をした後、明くる朝まで元気でいてくれた。





雪国の芍薬 しやくやく

櫻子

ニゲラ きんぼうけ (金鳳花科)

芍薬「みゆきフェニックス」 ぼたん

(牡丹科)

カラー そとこも (里芋科)

陶鉢 (アメリカ)

北信州に「みゆき野」と呼ばれる地域がある。美雪、深雪が由来とされる雪深い土地だが、このシャクヤクはそんな産地で育ってやってきた。良い花をつくるため地域で勉強会を重ねてこられたそうだ。冬の間、雪の下でぐっすり眠ったあとの花。そうとは知らず選んだ花は偶然にも雪のような白い花だった。



ユリとカンパニュラとバイカ
ツツジとメイちゃん。



稽古の花 ⑧ 仙溪

5月28日撮影

木苺（薔薇科）

ガーベラ3色（菊科）

ワイングラス（スウェーデン）

ガーベラ3色とキイチゴのシンプルな投入です。稽古で一つの花瓶にいた花を、自宅では写真のように器2つに分けて飾るのも楽しいですね。

置く場所に合わせて、いけ方、置き方を工夫してみてください。

キイチゴに輪ゴムで十文字に仕掛けをしておくと、ガーベラがいけやすくなります。





縞太蘭 しまふと

姫萱草 ひめかんぞう

生花

二瓶飾り にへいかざり

仙溪

主瓶 しゅへい

縞太蘭 かやつりぐさ (蚊帳吊草科)

副瓶 そくへい

姫萱草 のかんぞう (野萱草、百合科)

アクリル水盤

写真のオレンジ色の花はカンゾウとして売られていたが、よじれた葉や花茎の長さ、花の咲き方などがカンゾウと少し違うので調べたところ、ヒメカンゾウのようだ。シマフトイと株分け生花にしようと思ったが、涼しげな器を2つ使い、それぞれにいた生花を並べて飾る事にした。こういうのを「二瓶飾り」と呼んでいる。器は同じでなくもいい。相性の良い大小の器などで、置き方も柔軟に変えながら良い景色をつくる。





石榴の花の投入ざくろ

健一郎

石榴（薔薇科）ざくろ

芭蕉の枯葉、枯花（里芋科）ばしやう

枯れアナナス（パイナップル科）

陶花器

人と関わりのある植物達を生けた。器は背の高い、人の気配を感じる器に生けることにした。この器からは無邪気で原始的な土を触る事の喜びを感じる。花と作為的な器がぴたりと重なり合いお互いに良さを増幅させ合う様を見ているのはいいものだ。

13世の集めていた器からは無邪気で挑戦的な作家の息を感じる。時間を作っては器を見に各地に行っているが、生産が途絶えたものや、勢いのあるものが少なくなってきたように感じはするが、面白い器や作家さんも見かける。自分が集める器をゆっくりと選んでいる。





夏^{なつ}櫨^{はげ}の立花 健一郎

夏櫨^{なつはげ}(躑躅科)
 大葉馬鈴草^{おおはぎのすくき}(馬鈴草科)
 撫子^{なでしこ}(撫子科)
 鳴子百合^{なるこゆり}(百合科)
 下野^{しもつげ}(薔薇科)
 姫百合^{ひめゆり}(百合科)
 桔梗^{ききょう}(桔梗科)
 貝塚伊吹^{かいづかいふき}(檜科)
 檜葉^{ひば}(檜科)

陶花器

ナツハゼに季節の草花をあしらった立花。請はナツハゼに、花フジさんの山のウマノスズクサを絡ませた。それぞれの草花の呼吸に合わせて手を動かしていたつもりだが、しばらく日が経つともう少し花のペースに自分を合わせられたのではないかと思ったりしている。お花のペースとは、その花のらしさや、固有の特徴に気がつき目を向けて触れるという認識である。それぞれの花と向き合い丁寧に生けていきたい。



同行之花秋

花伝書を見る

二株砂物 棕欄真

「砂の物の内行の花形」

西村松庵

棕欄 百合 晒木 松

嫩葉 杜若 羊歯 柘植

檜扇 苔木

(立花時勢粧・上)

シュロの幼木を真に立て、シュロの古木の太い幹を株立にした砂の物。シュロは中国から平安時代に九州へ渡ってきた外来種だが、南国の風情が好まれたのと、様々に利用できるもので各地に植えられた。また実を食べた鳥が種を運んで山間に育っているところも多い。

幹を包む繊維層はシュロ皮と呼ばれ、縄や箒、束子になり、太い真つ直ぐな幹は梵鐘を撞くのに使われる鐘つき棒、撞木となる。程良い柔軟性があつて釣鐘を傷めないそうだ。切り出した後の切り株の横で、百合が咲く景色も実際にありそうだ。

「砂の物」は「株立」とも呼ばれ、口の広い鉢に砂を敷き詰めたところに、太く、低く、広く、薄く立てるものをいう。「景気するどに花形勢力風流なる様に立つべき」と書かれている。砂の物には自然の妙味を感じる景色がもとめられる。どんな幹や木をどのように集め、そこにどんな花を品良く添わせるかが見せどころだ。



西村松庵

山の印象をいける

△表紙の花▽ 櫻子

蝮草 (里芋科) まむしぐさ
 桔梗 (桔梗科) ききょう
 京鹿の子 (薔薇科) きやうかのこ
 蛭袋 (桔梗科) ひるふくろ
 牡丹唐松 (金鳳花科) ぼたんからまつ
 横長陶水盤

山中で花に出会う楽しみは格別だ。こんなところにこんな花が！と、最初の出会いに感動し、次の年に再会できるとまた嬉しくなる。花には足がないので、人が会いに行かないと会えない



が、そう簡単には行かない。なので切り花で山野草が売られていると連れ帰ってしまふ。この花は6月初旬の切り花たち。心の中の山の風景だ。これからも色々な花に会いに山へ行きたい。



6月6日は、いけばなの日
 いけばなプレゼンテーション2024 ～leaf 葉をいける～

- ⑥ 桑原健一郎 オーガスタの葉 蘭 (エンシクリア) 芭蕉の葉 パナナ 器: 南瓜形陶鉢 (宇野仁松作)
 ⑤ 中辻真紀子 流木 花菖蒲 菖蒲の根と葉 鳴子百合 器: 銅砂鉢

中国の挿花^{そうか} ⑧

仙溪

夏むきの挿花図を探して見て見つけたハスの絵に、多くの詩が書き加えられている。清の第4代皇帝、康熙帝（1654～1722）の時代に描かれたあと、のちの皇帝や皇族、書家、画家、政治家、計13人が詩を寄せている。上部にある「珠池寫妙」の文字とその下の詩は第6代皇帝、乾隆帝（1711～1799）によるものだ。絵の題名「敖漢千葉蓮」の敖漢は北

京の北東あたりを治めていたモンゴルの部族名だ。千葉は千弁という意味だろう。絵のハスはどれも花弁の多い重弁咲きで、一つの茎に二つの花が咲くものも見える。康熙帝の時代、北京北東部に避暑山庄が建てられ、その御苑池に移植した敖漢千葉蓮をことのほか愛されたそう

だ。清は満州^{まんしゅう}、漢^{かん}、モンゴル、ウイグル、チベットの五部族を少数派である満州人が統治した。各民族の自治を認め、

争いよりも和を優先した。皇帝が夏を過ごす離宮は、それぞれの長が訪れることで融和を確認する場所でもあった。ハスは中国語で「荷」とも書き、その発音は「フー」。そして「和」の発音も「フー」だ。様々な土地から贈られたハスが咲き、賓客をもてなす。ハスは他民族の和の象徴だったのだろ

『敖漢千葉蓮』 清 蔣廷錫^{しょうていしやく} 台湾国立故宫博物院所蔵
出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

この絵は康熙帝が亡くなる年（1722）の夏に描かれている。康熙帝は中国史上最も偉大な君主の一人。政治的才能と慈悲深い配慮の理念をあわせもち、科学や芸術にも強い関心を持っていた。朝4時に起きて書や絵画の練習をしてから朝廷へ向かったという。



挿花図ではないが、ハスの印象的な絵を見つけた。題名の「琴歌南風」について調べると、「南風之詩」という故事に行き着いた。昔々、舜という帝王（紀元前2千年頃）が五弦の琴を弾いて南風の詩をうたうと世の中が平和になったというお話だ。詩では「南風の香りが民の怒りを和らげる、南風の時に民の財を豊かにせよ」と、民を思う舜帝の姿が詠まれている。

絵ではハスの甘い香りが風に運ばれてくる中で舜帝が琴を弾いている。「南風之詩」の風景にハス選ばれたのは南国のイメージと共に、ハスに象徴された「和」への思いを感じる。ハスの花の姿や香りが人の心を豊かにしてくれる。

この絵は人物事蹟12幀の一つで乾隆帝の時代に描かれた。乾隆帝は古今の書物を編纂しなおす大文化事業を成し遂げている。歴史に目を向け、文化を政治に生かそうとしたのだろう。

もう一つ、夏に涼を感じる絵をご紹介します。明の「山亭納涼図」には山の庵で寛ぐ文人と童僕が描かれている。庭に育つタチアオイを切らんとする童僕の足元には、すでにザク口の花（？）が挿された壺が見える。庭の花を器に挿す風流こそ、文人の理想の世界だったのだろう。



㊤『人物事蹟十二幀・琴歌南風』清 金廷標（?～1767）

㊦『山亭納涼圖』明 周臣（1450～1535）

㊤㊦とも台湾国立故宮博物院所蔵。出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

どちらの絵にも、植物の間をぬけて、心地よい風が吹いている。



雪柳 除真立花

仙溪

- 雪柳 (薔薇科)
- 檜扇 (菖蒲科)
- 竜胆2色 (竜胆科)
- 鶏頭 (莧科)
- ヒペリカム (弟切草科)
- 貝塚伊吹 (檜科)
- 小菊 (菊科)

陶花器

夏の立花は丈夫な花材を選び、あまり負担をかけずに立てたい。ユキヤナギはペンチで茎を揉みほぐし、針金を添え、茶色フローラルテープで巻いてから慎重に繞めている。花材を傷めない細工を心がけたい。

